

シュレーディンガー
の猫

楸

○目次

シュレーディンガーの猫

1	シュレーディンガーの猫	8
2	ハイゼンベルクの不確定性原理	30
3	オルバースの夜空	38
4	アインシュタインの特異点	80
5	シュヴァルツシルトの地平線	112
6	ホーキングの粒子線	142
7	崩壊する真空	150

8 そして再び、シュレーディンガーの猫 ……………

170

9 エピローグ…愛を謳う光円錐 ……………

184

シュレーディンガーの猫

1 シュレーディングアの猫

どこかで、猫の鳴き声が——聞こえた気がした。

縦ばかり長くなってしまった自分と違って、彼はその背に見合うだけの肩幅の広さがあると思う。けれど鍛え上げられた身体だと、彼の身体付きをそう評する皆の言葉は、いつもこうやって彼の正面に立ち、彼の姿を目にする私自身にとっては、耳にするたびに微かな違和感を覚える言葉だ。

広い背中から腰、そして足へと続くラインはすらりと伸び、がっしりしているというよりは、少年の面影を残しているような細さを思わせる。大きな肩から繋がる腕は、その所為で身体から離れ浮いているように見え、元から長いその手足の長さをよりいっそう強調しているかのようだ。

私は僅かに目を伏せた先ほどの姿勢のまま、彼のその、肩から左腕へのラインを目で辿った。

玉座に座る女王に新年の祝詞を寿ぐ光の首座の凜然とした声が、謁見の間の静かに冷えたドーム状の天井を巡って、私の耳元まで届いて来る。それに重なるのは、外で静かに降り始めたらしい雪の音だ。

紗が鳴るような雪の降る音は、絶え間ないのに不思議な静寂を感じさせる。いつもそう思う。

玉座で今ばかりは神妙な顔をして新年の儀に立ち合っている、候補生時代から相変わらぬお転

婆で愛らしい女王が、せっかくの新年だから積もらせるつもりなのだと、さつきまで私達と共に控えていた間で話していたのを思い出した。

さつきの猫は——この新年の夜の、凍えた雪の中なのだろうか。

だとしたら、猫は、生きているのか、死んでいるのか？

そんなことをぼんやり考えながら、正面の彼の長い腕を目で辿っていた私の視線は、そのまま彼の指へ辿りついた。

その大きさに比べて肉付きの薄い彼の手は、その所為でよりいっそう大きく広く見える。指も長くて、節と節の間で細くなっているそれは、むしろ繊細さを感じさせる程だ。

その時、彼が微かに身じろぎした。

長い腕と細い指は、まるでそれら自身が独立した生き物であるかのように滑らかに動いた。蛛を思わせる細く長い指先が、5本ばらばらに、優雅な弧を描いて空気を舐めた。

その、彼の、ゆびさきを、見た瞬間。

言いようのない衝動が、一瞬で体中を駆け巡った。全身の血液が逆流する。肌の表面がざわついて自分から離れていきそうになる。

頭に上ったのと同じ熱さで、身体が縛られ硬直して動けなくなった。

まるで、彼のその指先で、全身を撫ぜられたかのように。

震える目蓋を静かに閉じた。密かに吐き出す息が揺れる。

……くだらない錯覚だ。一瞬の。いつまでも引きずっていい感傷とは違う。早く消さなければ。暗くなった視界の奥で、心を空にして息を落ち着ける。ひとつ、深呼吸。そしてもうひとつ。

大丈夫。もう大丈夫。

ゆっくりと目を開く。

そうして、目覚めた私は。

——あの、星の瞬きのような、アイズブルーの。
その瞳に、射竦められた。

「……………」

……俺は目覚めた姿勢のまま、ぼんやりとベッドの天蓋を眺めながら、今の夢を反芻した。

自分で自分の姿を、まるで他人のように正面から見るというのは気持ち悪いものだった。どうやら立っていた位置からして、俺は夢の中でリュミエールになっていたようだが、なぜそんな夢を見る羽目になったのかさっぱり解らない。

目覚めた瞬間に雲散霧消してしまった夢の内容はおぼろげで曖昧で、ただ酷く強い感情と、それから自分の指が鮮明に映し出されていたのを思い出す。

俺は横になったまま、顔の前に掌を掲げてみた。あまり改めて考えたことなど無かったが、確かに広い手ではあると思う。そういうえば女達はよくそういう台詞を口にする。特に彼女らの好きなのは俺の長い指らしく、触れるか触れないか程度に一撫でしてやるとあつという間に顔を赤くする。

女というのは本当に可愛いものだと思って、ベッドの中でくつくつと笑った。

夢の中で俺の指を見ていたリュミエールは——もしこの手で触れたら、どんな反応を見せるのだろうか。

そこまで考えて、想像が妙に生々しくなりそうな予感に思考を止めた。くだらない。

俺はベッドに手を付いて身を起こした。フランス窓の外に目をやる。外は穏やかな日差し、暖かそうな良い天気だ。

ふと、夢の中の、凍える雪の夜を思い出した。

実際に新年の儀のとき、雪の降る、寒い夜があつたような気がする。あれは何年前の新年だっただろうか。

あのとときの鳴き声をあげた猫は——生きていたのだろうか、死んでいたのだろうか？

（シュレーディングアの猫は、生きているのか、死んでいるのか？）

唐突に昔の、その言葉を思い出した。

今日は日の曜日だが、すっかり日の昇つたこの時間になつてもランディは来ない。

新しく聖地に来た緑の守護聖を含めて、今日からお子様達相手にルヴァの講義が開かれることになつていたことに気がつく。

偶然にも夢の中で出てきた、久しぶりで懐かしいその話を聞きに行こうと、俺はベッドから出て出掛ける支度を始めた。

「えゝつまりですね、女王陛下の、御力の本質とは、時間の操作——」

「——では、ないのですよ——」

真剣な（いや背中しか見えてなかったから単なる気配からの想像でしかないのだが恐らく当たっ

ているだろう)顔をしてルヴァの講義を受けていた年少3人組が、俺のその言葉に総崩れになった。

「——っおっさん！ 似てもねえ物真似で茶々淹れるんじゃないやねえよ！」

がばっ、と机に突っ伏していた顔を勢いよく振り回して、ゼフェルが睨め付けてくる。

「失礼だな。誰が聞いてもルヴァそのものだし、茶化してる訳でもないぞ」

「半分正解で、半分は間違いですよ」

唐突に背後から声が聞こえて、俺は内心ぎょっとした。振り返ると、いつの間にかいつもルヴァの執務室に来たのか、リュミエールが入口近くに立っていた。くすくす笑いながら流麗な動作で歩いてくる。普段の執務服よりも滑らかそうな、艶のあるローブがさらさらと紗の音を立てた。

後ろには、にやにや笑いの極楽鳥の派手な彩りも見える。

「全然似てないのは確かですけど、オスカーの発言の内容に嘘はありませんよ」

「本当ですか、リュミエール様」

「ランディ……お前、俺はお前のことを可愛い弟子だと思ってたんだが……」

思い切り凄みを効かせた声でそう言うと、要領の悪い風の守護聖は慌てて両手と首を振った。

「ち、違うんですよ、確かに剣技の事だけは頼りになる人だと思ってるんですけど」

「だけは？」

ますます墓穴を掘るランディは、俺への言い訳で青くなったり赤くなったりと忙しい。年下のはずの緑の守護聖マルセルでさえ、両手で頭を抱えて再び机に顔を伏せている。

「私達もさア、ルヴァにそれやられて、思いっきりズッコケさせられたもんやねえ」

思いっきりズッコケるオリヴィエ、見てみてえ、と鋼の守護聖が呟くのが聞こえた。

リュミエールのくすくす笑いは尽きることがない。

騒がしく、暖かい空気はとても幸せさを感じさせる。この水の守護聖と俺が同じ場にいて、こんな冗談を普通に交わせるようになったのはいつからだっただろうか。

何かきっかけがあった気がするが、思い出せない。

どうも今朝のあの夢から覚めてから、何かいろんな事が曖昧になっているような気がする。

「邪魔して悪かったわね、ドーぞ続けて頂戴、ルヴァ。アタシたちはここで見学させてもらうからね」

シヨールをひらひらせながらのオリヴィエのその言葉に、俺は我に帰った。先に座ったオリヴィエに促されてリュミエールが2人掛けのソファに腰掛けるのを見て、俺も手近な椅子に座る。

「それにしてもランディ、お前、前に1人でルヴァの講義を受けたはずじゃなかったか？」

「あ、えっと、そうなんですけどオスカー様……俺、馬鹿だからほとんど忘れちゃって……」

あはははは、と無駄なほど爽やかに笑いながら頭を掻くランディに、俺ですら頭を抱えそうになった。

「女王陛下の御力の成り立ちくらい覚えておけ。ルヴァ、容赦は要らんから宜しく頼むぞ」

ああっとはいはい、では講義を続けましょうね、というルヴァの言葉に、3人がルヴァと小さな黒板の方へ向き直った。

奴らの後ろでめいめいの茶を持ってそれを見学する俺達も、かつてああやって、3人並んでルヴァの講義を受けた事があった。懐かしい風景だ。

「えー一般にですね、女王陛下の御力は時間の操作とされていることが多いんですが、あーそれ
もあながち間違いとは言えないんですけどねー、ですがそれだけでは、例えば次元回廊のように離
れた場所を一瞬で繋いでしまうような、空間に関する陛下の御力の説明がつけられないんでして、
実はその本質はもつと深い所にあるんですよ。」

それからルヴァは、新入りの緑の守護聖の方を向いた。

「ときにマルセル、貴方は聖地に来る前、学校で『エネルギー保存の法則』というものを習ったこ
とがありますか？」

緑の守護聖は二・三度戸惑った後、小さく頷いた。

「ではマルセル、エネルギー保存の法則について貴方の知っている事を話してもらえますか？」

そう言われてマルセルは、うつむき加減になって真剣に考え込んでいる。

「えっと、エネルギーっていうのは例えば物体の運動の速さとか、物体の持つ温度とか、物体の置
かれている高さとか、そういうものが全部エネルギーで、それらは互いにいつたりきたりするんだ
けど、全体として足し合わせたエネルギーは一定だっていう法則です」

うんうんその通りですよ、よくできましたー、とルヴァはにこやかに頷いた。

「つまりですね、高い所から鉄の玉を落とせば、その下にある釘が……」

「うざってえ話し方してんじゃねえよ、全員分かってるんならさっさと先に進めろよな」

相変わらずの鋼の守護聖の物言いに、ランディが腰を浮かしかけて何かを言おうとした時、

「あーそうですねー、あなたの星は工業の発達した人工惑星でしたから、物理学はお手の物です
よねー……でしたらゼフェル、」

ルヴァが絶妙なタイミングで、そう話を続けた。

「あなたは、そのエネルギー保存則が成り立たなくなる状況があるということを知っていますか？」
「はあ？ そんなの知らねえよ」

エネルギー保存則つつたら宇宙すべてを支配する大前提の法則だし、法則が成り立たなくなるんじゃ法則の意味が無えじゃねえか、と続けるゼフェルの言葉に、ランディとマルセルも小さくうんうん、と首を縦に振る。

「ええ確かにですね、私達の生活しているレベルの大きさでは、エネルギー保存の法則は何時何なる時にも成り立つ法則なんですけれども、もつと小さな……われわれを構成している原子の世界、あるいは原子を構成する、もつと小さい素粒子と呼ばれるものの世界では、エネルギーは保存されていなくてもいいのです」

ああその話かよ、とゼフェル一人は納得げた。よく解らないといった雰囲気のランディ（ランディお前な……一度以上は聞いた事があるはずだろう）とマルセルに向かって、ルヴァは丁寧に（ご苦労なことだ）説明を続けた。

「つまりですね、電子ですとか、光子ですとか、他の様々な素粒子ですとか、これらは原子や分子や私たちを構成する粒子なんですけれども、それらはほんの短い時間であれば、何もない状態からエネルギーを得て、唐突に出現することが可能なんですよ」

これを仮想粒子と言って、実際に存在する粒子、实在粒子と言うんですけれどもこれと区別することがあつたりしますが、実際に両者に違いは何一つないので別にそこまでは覚えなくていいです、だの何だのとルヴァが小さな声で言っているのが聞こえる。必要なければ言わないほうが話が混乱

しなくて済むんじゃないか、とこういう時いつも思うのだが、それを言ってしまうのがこの地の守護聖の地の守護聖たる所以だろう。

「そしてですね、こういう小さな小さな世界では、確かな事は何ひとつなくなってしまうのです。……素粒子は出現したかもしれないし、出現していかないかもしれない。ここにあるかもしれないし、あちらにあるかもしれない。全てが曖昧であやふやで、全てが可能性……確率でしか話せなくなってくるのです」

「あ、思い出しました！」

ランディの声は無駄にでかくて、離れて聞いていた俺でさえ驚いた。忌々しそうにランディの方を見たゼフェルが、嫌そうな顔をして耳を塞ぐ。

「それで確か、素粒子ができるかどうかで猫が生きるか死ぬかって」

猫の鳴き声が——昨日の夢で聞いた猫の鳴き声が、俺の頭の中で再現された。

雪の降る夜。見えない猫の姿。

「ああ、ちよつと話が先に飛んじやいましたね、でもまあいいですよね」

ルヴァのその声で、俺の意識の光景は現実を再び写し始めた。

「ええとですね、そういうった素粒子の性質、全てが可能性でしか語れないという性質は私たちの世界に馴染みのないものですから、そうですね、例えば林檎がそこに在るか無いか解らないなんていうのは奇妙ですよ、ですからそのような考えに反発した人は多かったらしくて、そういう人た

ちが反論に使った話として『シュレーディングアの猫』という例え話があるのですけど」

ふんふん、とそれぞれ異なるニュアンスで3人の後姿が相槌を打つ。

「猫をですね、箱の中に入れてしまつて蓋をするわけです。この箱には仕掛けがありまして、さつき話したように粒子が唐突に出現すると、それを検出するような装置が付いています。で出現した粒子が検出されると、あらかじめ箱の中に用意されていた毒ガスが箱の中に充満して、猫は死んでしまふ、そういう仕組みになつてゐるんですね。そうすると、」

そこでルヴァは一息入れた。

「先程も言いましたように、粒子は突然出現するかもしれないわけです。でも出現しないかもしれない。これらはすべて可能性の話ですから、ここで仮に粒子の出現する確率を50%とします。そうすると、毒ガス発生装置の動く確率も50%、したがって猫が死んでしまふ確率も50%です。けれども——」

懐かしい話だ。俺達も——その頃はまだ、俺とリュミエールの2人だけだったが——一番最初の講義で、同じ話を聞いた。

「猫が生きているかどうか、外からは一切わかりません。箱を開けるまで、猫は生きているとも死んでいるとも言えない状態なのです。」

そんなことつて、とルヴァの件はくたり続く。

「そんなことつて、ありうると思いますか？ 目の前の箱の中に確かに猫はいるのに、生きているか死んでいるか、分からないなんて。たとえ箱を開けなくても、猫はその中で、生きているか、死んでいるか、明確にそのどちらかに分かれる筈だとは思いませんか？」

ランディとマルセルが困惑する様子が見て取れる。俺も最初は悩まされたものだ。続くルヴァの質問に。

「さて——はたして、猫は生きているのでしょうか、死んでいるのでしょうか？」

『猫は

』

俺は驚いて視線を移した。リュミエールとオリヴィエが並んで座っている方に。2人が不思議そうな顔をしてこちらを見る。

「……いや、何でもない」

別にそこから聞こえたわけではなかったが、何かがどこから、ほんの微かに聞こえた気がしたのだ。何もなかった振りをし、2人にそう答えて視線を落とした。

その所為で、小さく溜息をつき、僅かに肩を落としたリュミエールに、俺は気がつかないままだった。

「えー結局ですね、正しい答えは『猫は50%の確率で死んでいる、50%の確率で生きている』と言えるが、それ以上の事はわからない』ということになるんですね。量子力学——素粒子などの小さい世界を扱う物理学の事をそう呼ぶのですけれど、量子力学はたくさんの素粒子の動き、場所、存在、それらの可能性については詳しく正確に記述できますし、たくさんの素粒子はそれらの確率に沿っ

て実に正確に動くのですが、個々の素粒子については何一つ確実な事を言えないのですよ」

ちよつと長くなつてしまいましたから、今日はこれで終わりにしましょうね、とルヴァが言う。ランディと（だからランディお前な……）マルセルはまだいまいち話の飲み込めていないという顔つきで、それでもルヴァに促されながら席を立った。

お子様には、特に14になつたばかりのマルセルには荷の重い勉強だろうが、守護聖として宇宙を見守り導く以上、必要不可欠の知識であるから、少々頑張つて習得してもらわなければならない。

2人に続いて席を立ったゼフェルの表情は、詰らない話に時間を取られたと言わんばかりだ。奴の出身惑星のような、物理学の下地がある環境では、今日の話など常識に近いだろう。

俺は——俺自身は、ルヴァの質問になんと答えただろうか？

そしてリュミエールは？

……どうしても思い出せない。どうも今朝から、思い出せない事が多すぎるような気がする。

「どーしたのよオスカー、妙に真剣な表情しちゃつて」

休憩しにこつちの方へ来たお子様達のために、紅茶を用意していたオリヴィエがそう訊いて来た。

「夢が……」

思わずそう口にしていた。オリヴィエが訝しげに眉を寄せる。

しまった。こいつは夢の守護聖だった。

「……たいした事じゃないんだが、どうも気になることがあつてな。それが思い出せないんだ」

「思い出せないんなら、ほんとにたいした事じゃないんじゃないの？ いーんじゃない、夢の事くらい、別に気にしなくても？」

意外にもオリヴィエの答は簡潔だった。もっと根掘り葉掘り訊かれるかと思ったが。お子様達もルヴァも、聞くとはなしに俺の話を聞いている。

リュミエールはと見てみれば、氣遣わしげな表情で俺を見ていた。

心配するな、の意味でひらひら片手を軽く振ってみせる。

こんなに、俺達の間で穏やかな空気が作れるようになったのは——本当に、いつからだっただろうか？

「シュレーディンガーの猫よね」

紅茶をカップに注ぎながら呟くオリヴィエの言葉に、俺は思考を中断して、そっちの方を向いた。

「何がだ？」

「あえて蓋を開けようとしなければ、中身の真実はわからないし、それで問題ない、って事。」

再び考え込み始めていた俺の心の動きを知っているかのように、オリヴィエはそう答えた。

視界の隅で、リュミエールの目が僅かに伏せられたのが見えた。

年に数度もない、おおつぴらに羽目を外した楽しい騒ぎの余韻を身に纏ったまま、私は宮殿のテラスへと出た。

女王の御力から紡ぎ出される時間の操作、聖地の新年をなるべく宇宙の平穏な時に合わせようと、その女王の御配慮を以ってしても全宇宙が一時に事も無しであろうはずもなく、ひとつ、あるいはふたつ程、気掛かりな星系が残されてはいたが、今日ばかりは無礼講として幾ら騒いでも光の首座でさえ文句ひとつ言わない。

この貴重な機会に皆と一緒に^{はしや}なって燥ぐ、それはそれでとても楽しい事だが、こうやって背後に幸せの騒がしい気配を感じたまま、静かなところへこうやって出、ひとりでは創り得ない祝いの余韻を、ひとり静寂の中で味わうのがとても好きだ。この上ない贅沢だと思う。

足元が何処となくふわふわしているように感じるのは、少し嗜んだアルコールの所為ではなく、いつもとは少し違う非日常の空氣の所為で。それすらも酷く心地良くて。

新年の儀の最中から降り始めた雪は、すでに見渡す限りの一面を白く染めていた。背後の室内の明かりが僅かな範囲を白く照らし出しており、そこから先はグラデーションを描いて闇へと続いている。

そのほんの少しの、本来の雪の色をしていた辺りに、影が落ちた。

影は私の視線の先から足元、さらに私の背後へと続いている。

広い肩、そして長い腕、……ゆびさき。

……私と彼の間に、常に強い緊張感が漂っているのは確かだった。

公式の執務でも、非公式の守護聖の集まりでも。彼と私が同じ場にいるだけで、周りの人々をも固めてしまうほどの緊縛感が常に付き纏う。

いつからこうなったのか……もう、思い出せないほど昔からのことだ。

……それは嘘だ、と心の中の良心が呟く。私は覚えているはずだった。

切掛けは——猫だった。

彼は私を強く揺さぶる。あらゆる意味で、あらゆる方向から。

私は彼と距離を置いた。そうしなければ、自分が保てそうになかった。自衛手段だった。彼と目を合わせた事など、ここ数年、なかった。

私はゆっくりと振り返る。

もう、逸らす事はしない。

私を真つ直ぐと見据え、ゆっくり近づいてくる、この、アイズブルーの瞳から。

彼は笑っていない。怒っても、哀しんでもいない。彼の顔には如何なる表情も無い。

彼と向き合っている私も、同じような顔をしているのだろう。

ただ視線を合わせたまま——彼と私の間の空間だけが、彼の歩みに伴って、少しずつ、縮んでゆく。

ほんの少し動けば身体が重なり合うほどに、近くまで来て、彼は止まった。

少しの間を置いて、腕が動く。ゆびさが、近づいてくる。

そして、あの、長い指が——私の頬を撫ぜた。

あの長い、節縛立った指が、まるでそれら自身に意思があるかのように、滑らかに動いて。触れるか、触れないかという程、微かに。

私は静かに目を閉じた。

彼に気付かれないよう、ゆっくり吐いた吐息が、震えた。

視覚の閉ざされた意識の中で、彼の親指が私の唇の上を滑り、他の指が私の顎を捉えた。僅かに指に力が込められ、私の顔は軽く上向かされる。

浮かされた様な熱を伴った、早鐘を打つ自分の鼓動だけが、耳の後ろで煩いほどに反響する中、
——猫の鳴き声が聞こえて。

私の顎を捉える指と、私の唇に触れる彼の唇。

——その感触だけが、全身を襲うようにして、私の軀を支配する。

掌を強く握り締めて、その衝動に耐えた。

……ほんの一瞬掠めただけの唇はすぐ離れた。

目蓋を上げれば、彼の見下ろす氷青の瞳が目の前にある。

……何故、と問う事はしない。

彼に背を押されるように促されて、テラスの階段を下り、私達は明かりから遠ざかるように歩き出した。

どこに向かうかなど解り切っていた。

私は、最後に一瞬だけ、猫の鳴き声がした方を振り返った。

そこは一面純白の雪景色に覆われている。

猫が生きているか死んでいるかなど、解りはしない。

当然だ。

蓋を開けさえしなければ。

シュレーディングアの猫が生きているか死んでいるかなど、誰にも解りはしないのだから。

使用人達の寝静まった彼の館の、テラスから私室に続くフランス窓を開けて、彼は先に私を室内へ促した。

私が足を踏み入れるのと同時に、風と雪が室内に舞い込む。背後から私の髪を靡かせた吹雪は、彼が私に続いて室内に入り、扉を閉める音と共に収まった。

立ち尽くす私の肩にはうつすらと白雪が積もっている。見るともなしに見る視界の中で、手際よく動く彼の広い肩にも。

そのまま見ていたら、彼は私にバスローブを手渡し、部屋の端にあるドアのほうへ促した。

何も考えない。……考えてはいけない。

脱衣所で祝儀用の衣装を脱ぎ、心持ち長めにシャワーを浴びた。上がってバスローブに袖を通したら、肩幅と袖が少し余った。どうやら彼のものらしかった。

バスルームから出てきた私と入れ替わりに彼が入った。ベッドに所在無げに腰掛けた私の耳に、シャワールームの床を叩く細かな水音が聞こえる。

身を包む緊張感も、軀の中から脈打つような速い鼓動も、どうしようもないほど生身であるのに。どこか夢の中の出来事のような感じがする。

今起こっている事態を、これから辿るであろう筋書きを、遠くの方から冷静に見つめている私がいる。

ドアが開く音がした。

私は自然に目を上げた。

彼の瞳は、ただ私を見つめる。そして私を縛る。

……彼はこうやって、何人の女性と夜を共にしたのだろうか？

まるで百年の恋を遂げた、本物の恋人同士のような……なんて手順通りなのだろう、と遠くの私が思う。

あの長い指で私の髪を梳き、あの氷青の瞳で私を見つめ、ゆっくりと唇を重ね……そして深い口付けへと私を導く彼も。

緊張とそれだけではなにかに身を固め、彼に触れられて、少しずつ融かされ、おずおずと彼の背に腕を回して応える私も。

……それが錯覚でないと、誰が断言できるだろうか？

彼の仕草は私に溺れていることがはっきり判る仕草で、時に激しく、時には甘く優しく、そうして私の身の内の熱に、共に熱くなる事を要求してくる。

彼の愛撫に軀はいとも容易く陥落して、私の軀は従順に彼に抱かれた。

遠くの私は容赦なく問う。

それすらも、錯覚ではないと、誰が断言できるのか？

……今だけは。

あの彼の腕が、長い指が、私を抱いている。

私だけを抱いている。

今だけは……なにものも隔てる隙などなく、彼とひとつだ。

そう思った瞬間、意識は白光の中に弾け飛んで、もう何も判らなくなった。

……私は幾度目かの目を覚ました。

外はまだ、先程までのようにその大半が闇に覆われていたが、新たに曙の赤から紫、そして青の微妙に混じり合った色合いが、昨晩のうちに降り積もった無彩色の雪の上を仄かに彩り始めていた。背中に彼の気配、そして私の軀を抱き締めるように回された腕。髪を掻き上げられた首筋に彼の寝息を感じる。

そつと柔らかい戒めから逃れようとしたら、腕に急に力が籠り、それから私の軀を強く引き寄せた。

彼は一度、背から私の首筋に顔を埋めたあと、意図を持って私の前面から覆い被さるように慣れた手探りで近づいてきた。その瞳は閉じられたままだ。

もう幾度目かわからないほどのことで、私は素直に彼に応じるように動き、また……長い口付け

が始まった。

夜中に薄く意識が覚める度に繰り返された、言葉のない受け答えは、頭よりも先に私の軀が覚えさせられてしまっていた。

けれど今は。

もう帰らなければならない。

非日常は昨日限りで終わったのだ。

ようやく唇が離れた後。

彼の目が開いて、私を見た。

その目は相変わらず何も語らなかつたけれど。

アイスブルーの瞳。

彼は本当に……とても綺麗だと思う。心からそう思う。

彼はしばらく私を見続けた後、私の髪を梳き、私を抱き寄せて髪の上に、首筋に、唇を滑らせては何度も口付けをした。

それは熱を煽る愛撫ではなく、まるで手放し難いものを手放し難く思う時に湧き出る仕草のようで、私にも胸を締め付けるような切なさを与えた。

そうやって私たちは、後朝の別れを惜しむ恋人たちのような、甘く切ない愛撫を何度も交し合つて。

……それすらもが彼一流の恋愛ゲームだと、私もこの浮かされたような熱にただ一時身を任せているだけだと、そう人から指摘されて、どうやって否定の仕様があるだろうか？

私には未だに解らなかった。

彼が何故、こんな行為に及んだのか。そして私自身が何故それに応えたのか。

……何故、と問うことはしない。

たとえその中身が何であっても、蓋を開けさえしなければ、誰にもわからないのだから。

蓋を開けさえしなければ。

シュレーディングーの猫が生きているか死んでいるかなど、誰にも解りはしないのだ。

猫自身にさえも。

私は彼の腕の中からゆっくりと滑り出た。彼の指は最後の一瞬まで私の動きについてきた。彼に背を向けたまま、身支度を整えた。テラスの外はもうずいぶんと明るさを増している。一步を踏み出した瞬間、後ろから強く強く抱きすくめられた。裸の腕が私を戒める。

耳元で彼の唇が動いた気配がした。でも何も聞こえなかった。

……長いのか、短いのか、わからない時間が過ぎて、彼の腕が緩んだ。

私は彼の腕の中から歩み出し、彼のほうを振り返らないまま、窓を開き、出て、……後ろ手で閉じた。

雪に閉ざされた静かな大地はすべての生物の気配を遮断していた。

猫の鳴き声も、もう聞こえなかった。

最初から最後まで、彼と私はただの一言も言葉を交わさないままだった。

明け初めの天頂では、星のように瞬く銀河団の姿が強く輝いていた。

2 ハイゼンベルクの不確定性原理

「それでは、先週の宇宙の動向について王立研究院よりご報告申し上げます。」

週明けと同時に、聖地は平常執務に戻った。いつものように週始めの御前会議の冒頭、エルンストの報告の声が流れる。

年末年始の宴の余韻など、もう何処にも無い。

もちろん、いつもと同じように私の正面に着席している、彼と私の間にも。

「先月から崩壊が進んでいた識別番号^{シリアルナンバー}0593492-00438712、固有名称タウ銀河系恒星サンドウリークですが、先週末の曜日に事象の地平線を認め、ブラックホールの形成が確認されました。以後ブラックホール・サンドウリークと呼称されます。超新星爆発前の質量は約¹⁰³単位恒星質量、ブラックホール形成時の質量は約54単位恒星質量、ホーキングの絶対温度は0.0000000015度、シュヴァルトシルト半径は約159 kmです。

その他にブラックホールの形成が確認された主な恒星と爆発前の質量について申し上げます。イザル銀河系恒星タラゼット、約83単位質量。ルクバー銀河系恒星フェルカド、約78単位質量。アゼルフアファジ銀河系恒星カーフ、約62単位質量。カイトス銀河系恒星フォルマルハウト、約56単位質

量。その他50〜30単位恒星質量の恒星13個に関してブラックホール形成を確認しております。

以上の恒星について各々の識別番号、固有名称、爆発前の質量、ブラックホール質量、絶対温度、シュヴァルツシルト半径を配布の資料1に詳記してあります。ご確認ください。

次にフェクダ銀河系恒星アリオトを始めとして以下¹⁴²142個の恒星に関して新たに超新星爆発を観測しました。うち19個の恒星については数ヶ月以内にブラックホールを形成するものと予測されます。その他52恒星にしましては限界質量を超えており中性子星に、残り71恒星にしましては星間ガスを形成するものと思われます。詳細は添付資料2をご覧ください。

また資料3にありますように、³⁶¹361個の小恒星につきましては、膨脹期を超え白色矮星への移行を認めております。

以上全ての恒星系にしまして、その支配惑星における生態系は発生してないか、もしくは他星系への移住を完了していることを王立研究院側で確認しています。

恒星系の報告は以上です。」

年始であろうが平時であろうが、エルンストを始めとする王立研究院のメンバーの仕事は丁寧で秀逸で変わらない。

恒星は崩壊を続けるし、それによって生成される莫大な量の残渣は新たな星雲を作り出し、再び億万の生命を育む揺籠となる。

ハイゼンベルクの不確定性原理は、宇宙に起こる大なり小なりの事象の揺らぎの幅を収束させ、結局はひとつの最も在り得るべき道へとその運命を導く。

私のこの矮小な身に、一時の、些細な出来事が起こったとしても。何も、何一つ、宇宙は変わりなどはしないのだ。

——彼と私の、その決して交わることのない運命も。

当たり前すぎる事実には、思わず小さく笑ってしまった。

エルンストの報告に従って、資料のページを繰ってゆく。合間にふと顔を上げれば、歳若い同僚たち、特に風と緑の守護聖は必死になって報告書の文章を追っている。

その純粋な直向^{ひたむ}きさに、自然と笑みがこぼれる。

なんと彼らは、真っ直ぐにのびやかで美しいのだろうか。

自分の身を省みて、笑みに自嘲が混じる。

私はそつと、再び資料の束に目を落とした。

「次に惑星系及びその文明の動向についてご報告申し上げます。……」

……軽く目を見開く。

繰っていた資料の間に見つけた単語。

——ミザル銀河系 恒星アルゴール——

……報告を続けるエルンストの声も、周囲のページを繰る音も聞こえなくなる。目の前の文字と数値の羅列も、あつという間に意識から排除されてゆく。

——そして代わりに視界一面に広がる光景は。

それがあの日の曙に見上げた天頂の銀河であつたと、そう気付いた。

「ちよつと、オスカー様だったら聞ける!？」

明後日の方向に飛んでいた俺の意識は、レイチエルのその声で現実に戻された。

慌てて頰杖を離してそちらのテーブルを見やれば、久しぶりにこちらの宇宙へ遊びに来た新宇宙の女王と補佐官が不思議そうな顔をして俺を見遣っている。

柔らかな日差し of 青空の下、女王陛下の宮殿のテラスは暖かい風が穏やかに吹いていて、若くとも十分に魅力的なお嬢ちゃんたちとのデートにはうってつけの日和だというのに。

レディたちをほったらかしにして、あまつさえこの炎の守護聖の隙を見せるなど、俺らしくもない失態だ。

それもこれも、最近立て続けに見るあの夢の所為だ。今度オリヴィエに文句を言つてやろうか。

「なんだかオスカー様、お疲れみたいですけど……」

栗色の髪のアンジエリクが心配そうに声を掛けてくる。

「ああ、済まない。最近夢見が悪くつてな」

俺の体調を気遣ってくれるとは光栄だ、と言ってウインクをひとつ投げてやったら、内気な彼女は候補生時代と同じように顔を赤く染めて俯いてしまった。

とても宇宙ひとつをその白い翼に担っている女王だとは思えないが、それも彼女らしくて良いものだと俺は思った。

「へー、炎の守護聖サマをへこたらせる夢って。どんな夢なんですか？」

レイチエルが興味津々な顔で聞いてくる。どんなことも気の済むまで追及する研究者肌の彼女らしいと言えば彼女らしいが。

「……いや、はつきりとは覚えていないんだが。目が覚めるとなんとも言えない嫌な気分させられる夢でな……」

俺は曖昧に言葉を濁した。ふうん、と半分納得のいったような半分納得のいってないような顔でレイチエルが応じる。

霞がかかったように夢の内容をはつきりとは覚えていないのは確かだが、全然覚えていないわけではない。だからといって夢の中で俺はリュミエールになつてるようで、あまつさえ俺とヤツてました、なんてのはとても人に言える内容じゃないが。

我が夢ながらどうしてよりによってそういうストーリー展開になるんだか、さっぱり判らない。夢を見ている最中にこういう疑問が沸かないのは全くもって不思議だが。

俺自身もあまり追求したくない内容なので、すぐに意識の中の記憶を打ち消した。

「で、麗しのお嬢ちゃんたちは気になつて気になつて仕方がない俺の噂話でもしてたのかな？」

「もう、そんなのじゃありませんヨ！」

素早く話を掘り替えると、聡明であつても純粋で世間馴れしていないレイチエルは、こちらの思惑通りに彼女ら本来の話を語りだした。

「アンジェリークが女王になったのはワタシだつて自分の事みたい嬉しかったんだけど、だつて親友だからね、でもでもやっぱりなんか納得いかないところもあつて、でもでもやっぱりなんかひどいよ、つて話。」

「ああ、その話か」

それなら以前にも何度か聞いたことがある。

新宇宙の女王と女王補佐官として相応しい、これ以上はない程の固い友情と結束を見せる彼女らだが、レイチエルは未だにこの件に関して消化しきれない含むところがあるらしい。

何だか微笑ましくて思わず笑ってしまった。

「笑い事じゃないですよ、オスカー様！」

ますますむくれて頬を膨らませ、むきになって反論するレイチエルは、普段の優秀な女王補佐官の顔をひととき脱ぎ捨て、歳相応の初々しい少女に見えてとても可愛い。

機嫌を損ねたらしいレイチエルを宥めようとして声をかける直前、背後からの別の声に俺の発言は遮られた。

「あ、アンジェリク、レイチエル！　いらっしやい、よく来たね！」

「あゝ、どうかしたんですか？　大きな声を出して」

「けっ、またおっさんがつまんねえ事言つて擲^{から}擲^かつてんだろ」

「本当なの!?　ひどいよ、オスカー様!!」

「……お前らな」

多少脱力しながら俺が振り返ると、午前中にはまた合同勉強会をしていたのか、お子様3人組とその保護者がまとめてこちらへ近づいてきていた。気合を入れなおし、声に力を込めてその姿に反論する。

「おい、俺を何だと思ってるんだ、その発言は」

「：当たらずとも遠からず、でしたよね、今のは」

聞かせる風でもなく小さな声でぽつりと呟くお嬢ちゃんは、内気な癖にこういうところが密かに恐い。

「ねえ、みんなで何のお話してたの？」

俺の位置でかろうじて聞こえた発言は、小さく肩を震わせて忍び笑いをしているレイチェルと俺以外には聞こえなかったらしく、マルセルがこちらのほうへ駆け寄ってきてそう聞いてくる。

「たまごが孵って新宇宙が誕生したときの話を、ね〜、アンジェ」

勢いよく振り返って顔を向けられ、ね〜、の部分の意味深に伸ばされ、アンジェリークはちよつと困ったようにはにかんで小首を傾げた。

「ああ、あの時はアンジェリークの力の貢献が大きくて、結局それが最終的な女王試験の結果に繋がったんだよな」

試験に勝った者と負けた者の両方を目の前に置いた状態でそう喋るランディは、一般にデリカシ―が欠けると称される発言に走っているような気がするが、それを耳にするや否やレイチェルはいえ、

「そうなんですよお、それぞれ！」

その発言に勢いを得たようで、矢継ぎ早に話し出した。

「だってだって宇宙のたまごってのは結局ビッグバンから発生した初期微小宇宙で、宇宙の創世なんてのは結局、宇宙全体の物質質量から宇宙の広さ恒星の量からその光度果ては宇宙の寿命に至るまで、究極的には全てたまごの大膨張つまり宇宙生成学で言うところの『インフレーション』の制御

にかかっていると云っても過言ではないんですよ！　だからワタシ王立研究院始まって以来の天才と称えられた頭脳を駆使して、何回も何回も何回も何回も重力方程式解いて、たまごに送るサクリアの配分からインフレーションの持続時間を何チックにするかなんてところまで計算し尽くして、そりやもう完璧☆、つてくらいに準備したのにい、なのにかこのー子つたらー！」

宇宙の女王をこーのー子呼ばわりするレイチェルは、もはやすっかりヒートアップしていてそのことに気が付かない。

「宇宙の創世に関わる理論も方程式も宇宙生成学も量子力学も全然知らなくて、計算も計画も、なゝゝんにもしなかった癖に、ワタシよりも上手にたまごを孵すなんてっ、信じられない！　もー守護聖の皆様方ワタシがどれだけ悔しかったかわかりますかっ!？」

そうレイチェルに力説されて水を向けられた年少組たちは、話の内容も実感もいまいち判らないらしく、困り顔で顔を見合わせたり曖昧に笑ったり約1名は相変わらずの仏頂面のままでいたりしている。

彼らのその反応に、レイチェルは大いに不満顔を作った。

俺も彼女の言いたい事はわかるが、実感として身に迫るものはあまり無い。それならばむしろ――

「ああゝ、貴女たちもよく来ましたねゝ、口……」

「わかりますわ。……そのお気持ち、よゝゝつくわかりますわよ、レイチェル。」

そう、ゆっくり歩いてきて開口一番、レイチェルにそう答えたこの青い瞳の女王補佐官なら、身に沁みて良く共感できる感慨だろう。

「ロザリア様！」

「2人とも、元気にしてた？ 新宇宙の様子はどうかしら？」

「陛下！ お久しぶりです！」

午前の執務が少し長引いたのか、少し遅れて昼休みに入れたらしい金の髪の女王とその補佐官がやって来、彼女らに滅多に会えない新宇宙の2人は椅子から立ち上がってとても嬉しそうな顔をした。

よく響く女の子たちの歓声は、澄んだ明るい青い広い空に良く似合う。

「でもロザリアったら、まだその事言うんだから」

上目遣いで拗ねるように、あるいは甘えるようにロザリアの顔色を伺う、金の髪の女王。彼女らがまだ女王候補生だった時代、頻繁に見掛けた光景と少しも変わらない。

ほんの少し前のことなのに、酷く懐かしく暖かい思い出のように記憶が蘇る。

「だってアンジェリーク、あなただったら」

ロザリアもその表情につられたのか、昔馴染みの呼び方で親友の名を呼んでから、あら失礼、と右手で唇を抑えた。

「陛下ったら宇宙の育成に関して、あまりに何にもご存知なくって、わたくし試験中、何度勉強をご指導し上げたことか。ルヴァにも何度もお手伝い頂いて。」

あーうんうん、そんなこともありましたねー、と地の守護聖は笑う。

「そもそもですね、どうしてスモルニィ女学院が何故、女王候補生のための特別クラスを設置しているか、その理由をご存知ですか？」

急に飛んだ（…と思った奴は思っただろう）話題に、ランディが首をかしげながら答える。

「……って、そりゃ女王になるための特別教育を受けてるからだろ？」

「それはそうですが、でしたらその内容はどんなものだと思いいになる？」

「えーっと……礼儀作法とか、宇宙の歴史とか？」

そう答えたのは緑の守護聖だ。

「そんな優雅なものばかりでしたらよろしいのですけれど、そういったものはほんの少しだけで。

実際のところは」

そこでロザリアは言葉を止め、大きく息を吸い込んだ。

「宇宙の運行に関わる、一般相対性理論ですとか超ひも理論ですとか量子力学ですとか

超大統一理論ですとか、一般社会では全っ然役に立たない恐ろしく宇宙学専門的な分

野ばかり勉強しているのですわよ」

かくん、とランディとマルセルの膝が抜けた。

考えてみればそうかという気もするが、知ってなければ確かに意外の極みかもしれない。

「ですから、女王候補生のクラスは一般クラスと分離されているのです。……アインシュタイン方

程式の展開計算をごく普通の女子生徒に教えても仕方ありませんしね」

とロザリアは、当時の苦勞を思い出したように深い溜息をつく。ちなみにアインシュタイン方程式

の展開計算は普通にノートに書き出すと30ページや40ページは優に超える代物だ。

「わたくしそういったクラスの中で幼い頃から一生懸命に勉強して、完璧な女王候補と自他共に認

められるまでに研鑽を重ねてきましたのよ。その努力の結果として見事女王候補に選出されたと思

ってましたのに、いざ聖地へ来てみればライバルと紹介されたお方はなんにも知らない普通の女の子でいらつしゃって」

ロザリアはちよつと拗ねたように隣の金の髪の少女へ視線を送る。その場の皆の視線を一身に受けた若い女王は恥じるように心持ち身を小さくした。

「試験が開始されてからも、守護聖方のサクリア……上、^{アップ}下、^{ダウン}奇、^{ストレンジ}魅、^{チャーム}底、^{ボトム}天の6つの香り^{カラー}に、赤、緑、青の3つの色……それらクオークの複雑な複合体である守護聖方の9つのサクリアの、大陸への分布からその比率、各々の相互作用に至るまで全て計算して、その上で守護聖方をお願いしてフェリシアへとサクリアを送っていただきましたのに、結局」

ロザリアは、さつきよりも一層深い深い溜息を吐いた。

「そういった類の計算など、なぐんにもなさらなかった陛下のほうが上手にエリューシオンの育成を進められて、次期女王が決まった時には陛下とお友達になれていましたから恨めしく思ったりなどは全然無かったのですけれど、陛下が即位してからもうたくし、どうして試験に負けたのかしばらく悩んだものですわ」

「そうそうそう！ そーですよねっ、ロザリア様！ もー信じられないっなんでふつーうの女の子のアナタたちの方が上手に育成しちゃうわけっ!？」

勢い込んでレイチェルが2人の女王へ詰め寄る。おいおいレイチェル、その態度は下手すると不敬罪だぞ。

ジュリアス様がこの場にいらなくて良かったと、俺は心底安堵した。

「だって……」

「だって……ねえ、陛下」

何とは無しに身を小さくし、顔を見合わせる宇宙の女王と新宇宙の女王。

「だって？」

畳み掛けるように、レイチエルが言葉の先を求める。

2人の女王はもう一度顔を見合わせた後、一堂のほうを振り返り、にこり、と、とても美しい表情で同時に微笑った。

「こうあつてほしいと——」

「ただ、そう願うだけで——いいんだもの」

示し合わせたような2人の女王の言葉に、2人の補佐官はこちらも図ったように揃って一瞬押し黙り、それから一対の大きな溜息を吐いた。

「それこそが、女王のサクリアの、本質とは言え——」

「なんか納得いかないもの、ありますよねっ、ロザリア様!？」

本人たちにとっては至極真面目な困惑は、しかし彼女ら4人の仲の良さを知っているだけにあまりに微笑ましく見えて仕方がない。

俺が声を押さえてくつくつと笑っていると、恐る恐るといった感じでマルセルがルヴァに話し掛けるのが聞こえた。

「あの……ルヴァ様？」

「はい？ 何でしょう、マルセル？」

そこでマルセルはふと我に帰って周りを見回し、自分が何とは無しに皆の視線を集めていることに気がついたようだった。顔を赤くして身を縮込ませる。

「いえ、その笑われちゃうかもしれないからいいです」

「あら、そういうのはよろしくありませんわよ。笑ったりいたしませんから、仰つて？」

ロザリアに促されて、緑の守護聖がおずおずと口を開く。

「あの……僕、女王陛下の御力の本質って何なのか、実はまだ知らないんですけど……あの、時間の操作だけじゃない、って聞いただけで、」

「ああ、そういえば最近は守護聖の実務に関連した話ばかりで、その話はこの間のまだ途中のままでしたね、うっかりしてました……ええとそうですね、でしたらこの昼食会が終わってから午後の講義でお話ししましょうね」

「あら、それ、私も聞いてみたいわ」

唐突に横から飛び込んだ台詞——金の髪の女王のその言葉に、ルヴァはそちらを向いて「はあ？」と数瞬ぼけつとした後、慌てたようにぶんぶん首と両手を振った。

「いえその、陛下の前で講義するなんてそんな恐れ多い、いえいえそんな困ります」

「駄目？ 私、昔の貴方の講義が懐かしくてまた聞きたいんだけど……」

小首を傾げ、困ったような上目遣いで見上げられて、ルヴァはますます慌てて顔と手をぶんぶん振り回し、顔を赤くしてだらだらと汗をかき始めた。

「いえその駄目だなんてことは全然ありません、ああええとそのそんな哀しそうな顔をなさらない

で下さい、いえあの、その私なんかのつたない講義でよろしければ」

「ほんと？ 嬉しいわ！」

ぱつ、と顔色を明るくして喜色を浮かべる綺麗な緑の瞳。彼女のこのきらきらした瞳を見ると、結局誰も彼も彼女のために何かしたいと思わずにはいられないような。

彼女の一転した喜びようにルヴァは明らかにほっとした顔を見せ、しかしただら流れ続ける汗は早くも午後の御前講義のことを心配しているらしく、ターバンの端布で額を拭っている。

「さあさ、残りの方もいらっしゃったようだし、取り敢えずは新宇宙の女王とその補佐官との久しぶりの再会を祝って、予定通りお食事会にいたしませんこと？」

ロザリアのその言葉に俺が背後を振り返ってみれば、並んで歩いてくるジュリアス様とクラヴィス様（珍しい光景はおそらくジュリアス様が出不精な闇の守護聖を引っ張ってきた所為だろう、それからその少し後ろには水の守護聖と極楽鳥の姿があった。

優雅に近づいてくる水の守護聖の姿を見て、思わず昨晚の夢を思い出し狼狽える俺を、リュミエールは小首を傾げて不思議に思ったようだが、やがてにこりと笑うと、何のお話をしていたのですか？ と訊いてきた。

「昼食会が終わったらな、ルヴァが陛下の御前でお子様たちに『女王のサクリア』について講義するんだとさ」

狼狽の理由を聞かれず内心ほっとしながら答えた俺の言葉に、リュミエールは何故か少し寂しうに目を伏せて呟いた。

「ハイゼンベルクの不確定性原理、ですか——」

その瞬間、唐突に俺の意識の目の前に映った、曙の薄闇に浮かぶひとつの銀河。

……嬉しそうにはしゃぎながらテーブルの用意をする複数の声と、青い空と明るい陽と暖かい風が、どこか遠くの出来事のように感じられた。

「どうして視察を申し出た？」

……いったい、私の何が、これほど——この人の意に沿わないのだろうか。

ミザル銀河系恒星アルゴール。総質量は¹⁵⁶単位恒星質量。

『人食い鬼』と名付けられたその超大質量級の恒星の、本来、生態系の発生し得ない星系の内部に、他星系の或る非主流派文明圏が建設した実験設備——。

先ほどの会議で議題に挙げられた、その建造物の視察へ、単に名乗りをあげただけだということに。こうやって、会議が終わって人目が無くなったとたん、検挙されるように足止められ、詰問と何ら変わらない口調で問われるほどに——何が彼の気に食わないのだろうか。

——私のすべてが、か。

そう納得せざるを得ない。

私は俯いて、彼の高温の炎色の瞳から目を逸らした。

「貴方が、何を気にかけていらっしゃるかは存じませんが……」

……あの、気まぐれのような夜があったからと言って。

それ以後の優しい関係を築くことなどを、期待したわけではない。

所詮あんなものは、不確定性原理に収まり得る範囲内のイレギュラーであって、ひととき振動した事象はやがて振り子のように元の位置へと収まるのが当然の成り行きだ。

だからと言って——何故私は、これほどまでに、彼に追い詰められなければならないのだろうか？

「現地調査と申しまして、陛下の御力を拝借し次元回廊を用いて、遠方の宇宙空間から視察するだけの調査です。——如何に私が力弱き、頼むに足りぬ存在であっても、その程度の役目は恙無く果たせるつもりでいますが」

……多少嫌味に響いただろうか。

私は顔を伏せたまままでいたから、彼の表情は窺い知れなかった。

彼の沈黙は意図が読めない。

私には、本当に彼が解らない。

……仕方のないことだ。

私と彼は、笑えるほど、こんなにも遠い存在なのだ。

「……お話がそれだけでしたら、私は出立の準備のために失礼させていただきます」

そういつて私は、彼に追い詰められていた壁際から離れ、彼に背を向けて歩き出した。顔を伏せ、彼と視線を合わせないままに。

「気がついていないのか」

立ち去ろうとした私の身体の、右腕だけに奇妙な衝撃が走った。宙に固定された右手に、私の歩みは中断される。

彼に腕を掴まれたのだと悟るまで、しばらく時間がかかった。

私は前を向いたまま、薄く唇を歪めて笑った。

私には、本当に——彼が解らない。

私は仕方無しに振り返った。

意図せずに向けた私の視線は、ちょうど彼の視線と真正面からぶつかる形になった。

星の瞬きのような彼のアイズブルーの瞳は、相変わらず何も語らないまま、ただ、私を見据える。

私と彼はこんなにも遠いけれど。

彼の瞳は、嘆息するほどに、とても——とても綺麗だ。いつもそう思う。

「いつまで夢の中に居るつもりだ？」

私の視線の先で、彼の唇はそんな言葉を紡ぐ。

——夢？

何の事ですか。

私は夢など見ていない。

そう言おうとした私の言葉は、不意に延びてきた彼の指の、私の顎を捕らえる動きに遮られた。
私の顔は固定され、顔を伏せることも、視線を外すことも出来なくなった。

彼のアイズブルーの瞳は、無表情のまま、ただ、私を見据える。

そして私を捕らえる。

——ああ、と、私は思った。

ようやく気がついた。

彼の瞳の光の色は、『人食い鬼』^{アルゴール}の、何もかもを飲み尽くすような、あの巨大で圧倒的な光の色に、そっくりだ。

この光の色に、食い尽くされてみたいと。
そう、思ったのだ。

私の考えたことをまるで読んだかのように、彼はその瞬間、強い視線の色をより一層強く煌かせた。

私の顎を掴む彼の指に、力が籠った。

「——いい加減に、目を覚ませ」

「――目が覚めた？」

……ああ、覚めたさ。お陰様で覚めましたともさ。

俺は真昼の太陽の直射光を目の前で遮る派手な金とピンクの髪に向かつて、内心、そう悪態をついた。

勢いをつけて芝生の上から上半身を起こし、乱雑に髪をかきむしる。自分の顔が顰め面になってるのが自分でも良く判った。

「なぐんかえらく機嫌悪そうじゃない。どーしたのよ？」

「誰の所為だと思ってる、夢を司る守護聖様」

オリヴィエは俺の言葉に、怪訝そうに眉を顰めた。そして何故か声を小さくして訊いてくる。
「例のよく解らない、思い出せない夢ってやつ？」

「まあな」

「レイチェルから聞いたわよ、また最近見てるんだって？ オスカー様にしては珍しいって、私に何か判らないかって興味津々そうに尋ねてきたもの」

俺は軽く肩をすくめた。

「けど断片的には憶えてるんでしょ？ 何の夢なのよ、それ？」

「判らん」

「判らなくて……」

「脈絡がない。何故そういう夢を見るんだか理由がわかれば別に構わないんだが、思い当たる節がないから気持ち悪いんだ」

何故俺が、夢の中でリュミエールになっているのか。

リュミエールになった俺が、何故俺と、ああいう関係、になっているのか。

リュミエールを抱いた、俺の目の前の無表情の俺が、何を考えているのか。

俺は空に目を向けた。

さつきと変わらず明るく青い空は、突き抜けるように澄んで広い。

日差しは決して不快ではない強い真昼の光で、風は聖地を包み込むように暖かく柔らかだ。

この疑念を抱く余地もなく心地良い現実に比べて、あの夢は、酷く奇妙に歪んで薄翳く、不自然だ。

いつかは——今は何物であるかもわからない、あの不自然さの原因と、向き合わなければならぬ
い時が来るのだろうか。

「……とりあえず起きなよ、ルヴァの講義が始まるよ」

オリヴィエの言葉がそう聞こえた。

いつもこいつは、俺が自分の不快な思考に沈みそうになる時に、タイミングよく声をかけてくる。

意図してかそうでないかは判らないが、意外に人思いで気配りの利くこいつのその一端であるのは間違いないので、俺は心の内だけで小さく感謝しておいた。

俺は芝生の上に立ち上がって、即席で用意されたいらしい青空教室の準備が整った様子の、人数が集まっている方向へ歩き出した。オリヴィエが俺に並んで歩きだす。

「それにしても、どうしてお子様たちの講義で——つと女王陛下もご臨席か、けどそれにしたって、昼寝中の俺をわざわざ起こす必要があったのか？」

「私もそう思ったんだけどさー、なんでだかりユミちゃんが、あんたも起こさないと、つて言うもんだから」

「リュミエールが？」

何故？

俺はリュミエールの姿を目で探した。

水色のローブは、俺たちの歩いている先、青空教室のどうやら中心らしい黒板の置かれたポプラの樹の、お子様たちがその前に並んでいる、その背後で少し離れて見学するように並べられた位置の椅子に座っていた。

近づく、俺たちへ背を向けていた格好のその姿が振り返る。

「オスカー、オリヴィエ」

俺たちの姿を見てふうわりと笑うので、俺は瞬間、疑問も忘れ、つい反射的に笑い返していた。なんととはなしに安心する。胸の奥で淀んでいた夢の重苦しく不快な印象が浄化されるようだ。

奴の近くに並べられていた椅子に、俺とオリヴィエは座った。

よくよく見れば、お子様たちの並びに混じって²⁵代女王陛下の姿もある。うっかりすると見逃す、そのあまりの自然な馴染みように、俺は半分微笑ましく、半分苦笑しながら笑った。

旧宇宙の星々を全てその白い翼の元に受け入れた彼女の治世になってから、宇宙はそれまで比べようもないほどに安定し、豊かな成長と発展を続けている。

星は日々、順順にその寿命を終え、崩壊を続けるが、それは以前の、ただ暗黒へと堕ち込んでゆくだけの終わりではなく、新たな生命へと還る正常な宇宙の営みとして、再び新しく若い星の輝きを生み出していく。

俺はなんとなしにリュミエールの方を見た。

リュミエールがそれに気付き、俺の方へと振り返る。

笑いかけてくる深海色の瞳。

その瞳に、夢の中の俺の瞳の色と、『人食い鬼』の、星の色とが重なった。

「——なあ、リュミエール」

気がついたときには尋ねていた。何か、とリュミエールが首を傾げる。

「恒星アルゴール……って、——ミザル銀河系の中にあつたよな。……今、どうなっていたっけ？」

訊き終えた瞬間、踏み込んではいけないうちに足を踏み入ってしまったと——。

背筋を走った不気味な戦慄と共に、何故か、そんなものを感じた。

オリヴィエが息を飲む気配が背後でする。

リュミエールは軽く目を見開くと、小さく微笑を浮かべながら、ゆつくりと目を伏せた。

「……憶えていらっしやらないのですか」

「リュミちゃん」

リュミエールが視線を上げてくる。深い色のその瞳で、俺を真正面から見つめる。

「あの星は——」

「リュミちゃん！」

小さくひそめられるように、しかし鋭く響くオリヴィエの言葉の響きは、明らかにリュミエールの発言を留めようとする響きだ。

「あゝ、それではあの僭越ながら、今から講義を始めますね」

場違いなほどにのんびり届いてきたルヴァの言葉に、俺たちの時間は唐突に遮られた。

リュミエールが口を閉ざし、再びゆつくりと目を伏せる。

オリヴィエが、明らかにほっとした様子で息をついた。

俺だけが何もわからないまま、疑問と共にその場に残された。

「えゝ前回の最後の講義では、ごく小さな領域ではエネルギー保存則が守られないことがあること、そのような状況においてエネルギーを得た仮想粒子が生成しうること、粒子が生成するか否かは確率でしか語れないこと、についてお話したかと思います。ええゝと、女王陛下も、ロザリアと一緒に教えました、かつてのそれらの話を、覚えてくださっていますでしょうか」

ポプラの木に掲げられた黒板の傍ら、なんだかんだで落ち着きを取り戻した様子のルヴァの開口一番に、うんうん、と、その目の前の木陰で年少の守護聖達に混じって着席する、ふわふわの金色の髪の後ろ姿が嬉しそうに頷く。

下手をするとランディあたりの方が記憶が怪しいかもしれないと思うが、一応の師弟関係にある身としてはあまり深く考えたくはない。

「ありがとうございます、陛下。」

笑顔のルヴァが話を続ける。少し離れた陽の当たる観覧席には、ロザリア、栗色の髪のアンジエリック、レイチェル、それから俺達。光の守護聖と闇の守護聖は、昼食会の後で早々に引き上げたらしかった。

「小さな領域、小さな単位では、すべてが確率でしか語れないということ。これをハイゼンベルク

の不確定性原理、もしくは単に不確定性原理と言いますが、これは何も仮想粒子に限った話ではなく、原理的には実在粒子を含めたすべての物質、空間、時間に対して言えることなのですね。ただ、制約は当然あります。

小さなものであれば比較的長い時間、広い空間に渡って素粒子は様々な存在できますが、大きな素粒子、つまり大きな質量を持つ素粒子は、質量というのはこれはイコール、エネルギーのことであると特殊相対性理論が示す通りで、そのような大きなエネルギーを持つ重い素粒子は、ほんの一瞬、ほんの小さな領域でしか存在することが許されないという、いわばトレードオフの関係にあるということです。

大きなエネルギーであれば、それを一つの領域に集めるための粒子加速器などが必要になります。が、小さなエネルギーであれば」

そう言うところヴァは、おもむろにマルセルに向かって掌を掲げた。その朴訥とした様子ではとてもそうには思えないが、ハイタッチ、の姿勢に見えなくもない。

「？」

緑の守護聖が戸惑いながら、はい？ たっち？ と、右の掌をぺちりと触れ合わせる。

「小さなエネルギー、小さな素粒子であれば、こうやって近くにいただけで、粒子の持つ位置の不確定性により、マルセル、あなたを構成する粒子と私を構成する粒子とが、入れ替わったりしているかもしれませんねえ」

(近くに)

俺は思わずリユミエールの方を見た。

リュミエールは、真っ直ぐ、その視線の先の講義の様子を見続けている。それでいて、俺の気配に気付いている。

「げえ、気持ちわるい」

「でも、間違いではないでしょう？ ゼフェル」

「まあ、事実だけだよ。喩えようってもんがあるだろうが」

「まあまあ、では、もう少し話の先まで聞いて下さい。」

この不確定性。ゼフェル、あなたもよくご存知のように、粒子がどこにいるか、どこに現れるか、この不確定性は本来、純粋な確率のみに支配され、それ単独では予測することも変えることも不可能です。本来であれば、しかしながらここに、

ルヴァは視線を巡らせた。目の前の木陰の金の髪の女王に、そして少し離れた陽の下の栗色の髪の女王に。

「この宇宙のあらゆる確率を、その願いの力で動かせる方々がいらつしやる。その方の強い願いに従い、粒子はその許された範囲の中で望み通りに振る舞い、時間と空間、これはエネルギーの存在により伸び縮みするものですから、時空が動き、ひいては巨視的な宇宙をも動かす。」

誇らしげに背筋を伸ばす神鳥の宇宙の女王と、恥ずかしげにやや俯いて、しかし緩く微笑む聖獣の宇宙の女王。

「我々はそのお力を、調和をもたらず、女王のサクリアと呼んでいるのです。」

時間を変え、空間を繋ぐ、女王のサクリア。

その御力をもつてして形成された、眩い星屑の次元回廊、その道を辿る。

漆黒の次元を渡る道を覆い尽くす聖なる光はあまりに清らかで、この身には到底直視できない。目を伏せて、半ば瞳を閉じるようにし、到着点までの道程を歩み進む。

やがて足元の暖かく包み込む光の気配は消え、一度暗闇が訪れた後、正面からの強烈な蒼い光が
睨越しに眼を焼く。

視線を上げた。

何もかもを飲み込もうとする、その光へ。

極高温の蒼く巨大な星。

恒星アルゴル。総質量は156単位恒星質量。

今回の視察の道に定められた終着点、宇宙空間の只中から、その人食い鬼の光を長い間、見詰め続けた。

そうしてからやっと、視線の手前、本来の視察の対象である、無骨で素朴な幼い造作物を見遣る。

恒星中央から見たこの軌道距離には、もともと濃密な小惑星帯があつた。

アステロイドベルト

しかし他星系に比べて遥かに濃密とは言え、幅1kmにももの広い範囲に渡って散らばっていた小惑星の数々が、その建設に必要なだけの資材として集積され、今は左右水平方向に直線的に配置しており、直線の中心には、恒星の青い光と恒星風とを受けてときおり綺羅と光る金属線が長く伸びていた。直線は左右方向へあまりに長く、視界の端に至ってようやく僅かなカーブが見え、恒星の周りに輪を描いているのだと気付かされる。

その細い金属を取り巻くように、一部の小惑星は既にパイプ状に再形成されている。パイプ状と言っても、金属線に大電流を流し、その熱で小惑星を溶解し空洞を形成した後、固化しただけのものであるから、内側面はともかくとして外見は恐ろしく不格好な塊のままだった。そう言われなければ空管の成形物だとは気付かない。

将来的にはここに集められたすべての小惑星が、恒星を巡って途切れることのない巨大な環状のパイプを形成し、やがてその真空の中を、光速の99.99999999%まで加速された素粒子がひた走り、衝突する。

恐ろしいほどに原始的で、恐ろしいほどに巨大な、粒子加速器の姿だった。

恒星アルゴールの総質量は156単位恒星質量。

これほど巨大な星は自らの重力が桁外れに大きく、その巨大な重力に抗するための核融合反応が必然的に高温高圧となり激しく燃焼するため、星の寿命が数百万年程度しかなく、少なくとも数億年かかる生命体の萌芽をその星系内にみることがない。

ここで粒子加速器を建設している人類は、隣接する他星系から来たそれだった。

その惑星内での文明圏が幾つかに分裂し争っていること、火山帯および海洋の双方に富むために連続する陸地を極端に欠いたこと、量子力学が未だほとんど展開せず核エネルギーの利用に至っていない一方で、星間航行技術が歪^{いびつ}なまでに発達していたこと、そして何よりも、ごく近隣に潤沢な小惑星帯を抱えるこの恒星アルゴールが在ったこと。そのすべてが、今回のこの事態に作用した。

ただ一点に莫大なエネルギーを集中させるため、粒子加速器は各文明の相応の発達段階にて建設される。通常は惑星の地上または地下に。そうして観測される素粒子同士^{素粒子同士}の衝突において、高エネルギーによるハイゼンベルクの不確定性原理に基づく量子力学的作用を観察する。

高エネルギーの下で新たな素粒子を発見すること、もしくは理論上想定された素粒子の——しかながらあまりにエネルギーが高く、通常的环境においては観察し得ない素粒子の——存在を確認すること、それは量子力学の正当な発達において必要不可欠の、必ず通過すべき段階だった。

だが通常は数十メートルから数百メートルの直線加速器、それから直径数kmの円形加速器までの巨大化を段階的に踏むはずだった。
スケールアップ

その過程で、宇宙の崩壊に繋がりがかねないあるひとつの可能性を見出すまでに。

それから以降のより高エネルギーの粒子加速器の建設に、慎重を期すようになるための段階的発展を、この非主流派文明圏は前述の理由により^{ひたひた}尽く端折った。そうしていきなり、この宇宙史上

稀に見る、想像を絶した恒星規模の粒子加速器の建設を開始した。

真空の崩壊。

先日の会議で懸案事項として議題に挙げられた、深刻な懸念がそれであった。

女王陛下のお力添えを得て、訪れたこの視察で、目の前に広がるその工作物は、実際に目にして
も原始的な文明の、幼稚としか言いようがない代物だった。

だが、所与の性能は充分に達成しうる。そして宇宙を崩壊に陥れる。

まるで子供のごく純粋な無邪気さが、時として大人の想像を絶するほどの残忍性として顕れるが
如く。

再び、視線を上げた。

何もかもを飲み尽くす、恒星アルゴールの蒼い光が、私の目を焼く。心を熱する。

あの人の瞳のように。

(オスカー)

いかな女王の恩寵たる不確定性原理と言えども、このおぞましい造作物を収める確率は、この宇宙の何処にも寸分たりとて存在しないはずだった。

無意識にゆつくりと掲げた、右手の先に熱が籠もる。

当初の視察するだけの予定には欠片も無かった、私のサクリアレベルの急激な変化に、遠く離れた王立研究院からのざわめきが微かに聞こえる。

眼下には未だ何も知らず、作業に従事する幾つかのシャトルが見える。高度に自動化されているとはいえ、建設物が全面的に崩壊すれば、幾十人か幾百人かの生命が消えるのは免れ得ないだろう。構わなかった。咎はどこまでも、この身に負うつもりだった。

「そこまでだ」

喉元に触れる、冷たい刃の感触。

背後から伸びる。

時は止まり、私は目を伏せ、再び、唇を歪めて笑った。

私には——本当に彼が解らない。

力を失い、ゆつくりと下ろす私の右手の、その途中でゆらりと炎のようなサクリアが漏れ出た。あれはきつと、貴方からの素粒子。

あの雪の夜に、貴方と私との間で交わされた。

心持ち引き下げられた剣の、しかし未だ私を射程に捉える切っ先と、彼の身体との間で、私は静かに振り返って彼を見た。

人食い鬼の恒星と同じ色の瞳は、やはり何も語らないまま、ただ、私を見据えていた。

その瞳は、本当に嘆息するほど綺麗だけれど。

私には、本当に貴方が解らない。

貴方だって、貴方なら、きつと、こうしたでしょうに。

3 オルバースの夜空

「まるでオスカーのような事をするのだな。そなたが」

」

私は少し逡巡してから、伏せていた瞼を閉じて頭^{かぶり}を振った。
四方八方から私を覆う、圧力さえ感じそうな程の光の中で。

あの時は、私もそう思ったけれど。

ただの錯覚だったのだ。

私の想いが、彼のそれと一致するなど。

最初から、一欠片も在り得ないことだったのだ。

光の守護聖の執務室は、白を基調とし、女王への敬意を表す金の配色がふんだんに施されている。
窓は可能な限り広く取られ、そこから差し込むのは常春の聖地の柔らかな日差しであるはずなのに、
この室内へ入った途端、有無を言わせぬ荘厳な光のユニゾンとなる。

恒星アルゴールの、彼の瞳のように何もかもを飲み込もうとする蒼い光とも異なる、それ。

オルバースの二律背反の、途方もなく明るい夜空が本当に存在したならば、こんな感じなのだろうか。

どこまでも続く、無限の星々が満ちる無限の宇宙――。

視界を覆い尽くす圧倒的な白い世界の中、背反者たる私の存在が未だここに在るのかどうかすら、もはや定かではなかった。

「……そなたの考えは、判らなくもない。万一の事が起こった時に宇宙へ^{もたら}齎す影響の甚大さを考えれば、今のうちにあの建造物を破壊してしまうのが賢明なのかもしれぬ。

だが、いかな理由があるとは言え、この度の視察における女王陛下のご意思に背く行動であったのは確かだ」

「仰る通りです。異論はございません。」

目を閉じたまま頭を垂れて、光の首座の言葉を受ける。

彼は黙したきり、ただ、私に投げ掛けるその視線だけを感じた。私の真意を測りかねているようだった。

「……自邸にて謹慎を命ずる。遍く宇宙を慈しむ陛下の御心について、よく考え直すように。」

無言で、深々と一礼した。

そして身を翻し去り掛けた半ばで、いささか私を宥めるように、光の首座が言葉を発した。

「オスカーも、そなたを止めるためとは言え、守護聖が軽々しく守護聖に刃を向けるとは。あやつにも、相応の注意をせねばな。」

足を止め、ゆっくりと振り返った。

いかに首座の言葉といえども、それは聞き捨てならない事だった。

「オスカーは、私の愚行を止めてくださったのですから。どうぞ咎めの無きよう、お計らいください。」

何卒、この身に代えましても、重々お願い申し上げます。」

先程までとは打って変わって力の籠もった私の声音に、彼は軽く目を見開き、そして黙って頷いた。

「……おい？」

訪れた部屋の奥、明るい窓際の溢れる陽の中で、セイランが妙なものを描き続けていた。

一抱え以上もある真っ白いキャンバスに、真っ白い絵の具で描かれる無数の点。惜しげもなく絵の具を使うのはいつもの事だが、この絵の白い点のひとつひとは、またことさら立体的に盛り上げられている。

「何だ？これは」

「オルバースの夜空ですよ。」

「はあ？」

「おや、炎の守護聖ともあろう方がまさかご存知ないんですか？　オルバースのパラドックス。」

「いや、そりゃ知ってはいるがな。」

「興味深いじゃないですか。無限に続く星々が創り上げる、太陽のように輝く全天の夜空、なんてね。実際に目にしたら、どういふものなのかなと思ひまして。」

「で、描いてみた感想はどうなんだ？」

「そうですね……」

感性の教官は陽を受ける目の前のキャンバスを眺め、しばし考えてから、言葉を続けた。

「ここの聖地の光じゃ、鑑賞するには柔らか過ぎますね。全天が太陽のごとく熱く明るく輝くオルバースの夜空の中で見てみたいところですよ。」

「それじゃ堂々巡りじゃないか」

呆れて返した。

全く、芸術家のする事はよく理解出来ない。芸術家がと言うより、こいつ自身の個性によるものだろうが。

学芸館の広間のようなこの部屋は至る所にガラス窓が嵌め込まれていて、ちょっとしたサンルームのようになっていところを、誰が持ち込んだのか大小様々な観葉植物が所狭しと配置されている。

「あの、結局、オルバースのパラドックスとは何なのでしょう。」

唐突に声がして振り向いた先では、そんな植物の葉と葉の間に埋もれるように赤錆色の髪が見え、一人掛けのソファの中でその大きな身体をいささか居心地悪そうに竦める姿があった。

「なんだ、お前も居たのか、ヴィクトール：そこで何してるんだ？」

「はあ、ここを通り掛かってから、そのパラドックスとやらが何なのかをセイランに何度か尋ねても、軽くあしらわれるばかりで。」

首を伸ばして視線をずらせば葉陰の更に隣、青い羽飾りを髪に差したエキゾチックな王太子も座っている。

「よう、タイムカ。お前も知らないのか？」

「白亜宮の惑星に居た頃に一応は学びましたが、セイランさんが仰らないものを、僕ごときが口出しするのもどうかと思ひまして。」

にこにこ濃厚なようで、こいつもなかなか食べない性質だ。たち

「お二方とも、こんな調子で。去るにも去れず、どうしたものかと」

子供のように困惑して頭を掻くヴィクトールの、その視線方向ずっと先の開いたままのドアの向こうに水色の姿が見え、俺の心臓が跳ねた。

「ごきげんよう、オスカー、セイラン。…おや、セイランは制作中ですか。」

リュミエールはそう言つて紫紺の髪 of 芸術家の方へ歩み寄り、キャンバスを覗き込んだ。その表情も、声色も目線も穏やかで、一瞬俺の胸を過つた暗雲が、この室内の柔らかな陽のように緩やかに晴れる。

夢の中で軟禁状態となつたリュミエールはあくまでも夢で、そもそも夢の中のリュミエールはこいつではなく俺自身であるのに（面倒な話だ）、それでもやはりこうやってその姿を目にすると、紛れもない安堵感が胸を満たす。

リュミエールは絵に目を遣つたまま、しばし沈黙した後で

「…オルバースの星空ですか？」

と顔を傾け、セイランに尋ねた。

「ご名答。どうして判りましたか？」

「無数の円が、すべて白い真円であること。円の直径が半分になると、その個数が4倍の割合で増えていること。それから、一見同じように見える白い真円ですが、素材と技法の異なる円が、大小にかかわらず入り混じっていること。そんなところでしょうか。」

「種類があるのか？」

「そうですね。顔料としては、チタニウムホワイト、鉛白、炭酸カルシウムは胡粉でしょうか、白亜

チヨーク

でしょうか、…この少し違う感じのものは、ひよっとして珪砂ですかね？
固着剤には、樹脂、乾性油、テンペラ、蠟、膠。」

「流石ですね。その流れるような解説で、そちらの憐れな方へオルバースのパラドックスについても説明してあげていただけますか？」

ひらりと舞わせたセイランの手の先を振り返り、相変わらずの困惑顔のヴィクトールとリュミエールとが顔を合わせ、ティム力が浅く頭を下げて一礼した。リュミエールが軽く声を立てて笑う。

「失礼しました。貴方方もいらっしゃったのですね、ヴィクトール、ティム力。オルバースのパラドックスはご存知ありませんでしたか？ ヴィクトール。」

「申し訳ありません、不教養なもので」

立派な体躯がリュミエールの前でますます縮籠るように見えた。

「そんなことを仰らないで下さい。ずっと王立派遣軍の任務に一筋でいらっしゃったのですから。」

そう言ったリュミエールはヴィクトールの方へ歩いてゆき、手袋に覆われたその右手を取り、そいつに向かって緩く微笑んだ。

おい、なんだか妙に近付きすぎやしないか？ こら。

リュミエールはヴィクトールの手を取ったまま、低く詠うように言葉を続ける。

「貴方がこれまで幾度となく航つてこられた、漆黒の宇宙。

…では、宇宙は何故、輝く星々が数多在るにもかかわらず、漆黒なのでしょう。その理由がわかりですか？」

おそらく疑ったこともないであろう事実を唐突に問われ、ヴィクトールは案の定、ぽかんと呆気

にとられた。ようやくしてから氣を取り直し、リュミエールに手を取られたまま、姿勢を正して返事をする。

「あ、その。それは、宇宙があまりに広く、星があまりに疎^{まば}らだからではないでしょうか。」

「宇宙は広い。星は遠く離れている。そうですね、その通りです。しかしながら」

リュミエールはそこでようやく精神の教官の手を離し、その手を明るい空へ掲げた。

「宇宙に星が均一に存在するのなら、我々の近くに、たとえば星がひとつしか無かったとしても。その倍の距離、面積として4倍に相当する球面上には、4倍の数の星が。3倍の距離の先、面積として9倍に相当する球面上には、9倍の数の星々が。4倍の距離には16倍の星々が。そうやって、全天にはどこまでも、無数の星々が存在するはずなのです。」

「遠くの星々は暗く見えるのではないですか？」

「星の明るさは距離の2乗に反比例しますから、2倍の距離にある4倍の数の星々がそれぞれ4分の1の明るさで輝くのも、3倍の距離にある9倍の数の星々がそれぞれ9分の1の明るさで輝くのも、同様にして遙か遠くの無限までもが、掛け合わせればすべて同じ光の強度になります。つまり宇宙は、どの方向も、均一の明るさで満たされていることが容易に求まります。計算すれば、すべての方向が太陽のごとくに熱く明るく輝いていることが容易に求まります。」

「ほう。しかし実際の宇宙はそうなっていない、と。」

ヴィクトールが顎に手を当てて考え込む。奴なりにこの命題の解決を探ろうとしている様子だ。

「では、宇宙空間に光を遮るような物質が存在すると考えてはどうでしょう。もしくは、宇宙がどこまでも続くという前提、均一であるという前提が誤りで、限りや偏りがあるとすれば？」

リュミエールが微笑んだ。出来の良い生徒を誇るように。

「良い回答ですね、流石です。…ですが、幾らか問題がありました。暗い物質が光を遮り続けると、やがて吸収した光と同じ温度になり、星と同じように輝いて光と熱とを放ち始めるというのがひとつ。後の方で仰った、宇宙に限りや偏りがあるという考えにはさらに重大な問題点があります。」

「何でしょう？」

「重力です。宇宙の星々はひとつ残らずその全てが万有引力に支配されているがために、宇宙に限りや偏りがあれば、星々は質量の多い方へと途端に収縮を始め、たちまちのうちにその距離を縮めて、最終的にはただの一点に崩壊してしまうのです。ブラックホールのように。」

「ああ、なるほど。」

「宇宙が無限であるとなると、バラドックス夜空は真昼のように明るい。宇宙が無限でないとすると、途端に崩壊する。これが、オルバースの二律背反です。…さて、では、何が誤っていて、何が正しいのでしょうか？」

腕組みをしたヴィクトールの、傾げた首の角度が深くなる。しばらく考え込んでいたが、やがてヴィクトールは腕組みを解いて溜息を付き、笑ってリュミエールへ軽く両手を広げた。

「降参です。正解は何なのか、教えていただけますか？ リュミエール様。」

水の守護聖は目を細め、穏やかに微笑った。

それはすべてを諦めたようでありながら、あまりに自然で、温かく、美しい笑顔だった。

「宇宙には限りがあり、時には限りがあり、光にも限りがあること——それが、この宇宙の法則です。」

そう言つて天から差し込む陽の光を見上げ、再度その手をゆらりと掲げる、その指先から紗のうな、星屑のような細いサクリアが流れ出た。

「すべての光は、有限の速さで疾走ります。すなわち、ここへ届いた光は、今この時の姿でなく、過去の輝きなのです。」

夢の中、リユミエール^俺の指先から、漆黒の中に零れ出たサクリア——

あれは、誰の？ 俺の？ あいつの？

「1億光年先の距離から届いた光は、1億年の昔の光。10億光年先の距離から届いた光は、10億年の昔の光。もし宇宙の現在^{いま}の年齢が100億年であるのなら、100億光年より先の光を見ることは出来ません。何故ならそれより遠くの光は、未だここまで届いてはいないのですから。」

溢れる光の中で、詠うような声は続く。

「故に星の光は、無限とは成り得ず、宇宙は漆黒の背景と有限の星々で彩られる。これが、答です。」

永遠は、いつか、どこかで、必ず否定されなければならないのです——たとえ貴方が、どれだけ永遠をこの世界へ顕現しようとしてくださっても。セイラン。」

唐突に声を掛けられた紫紺の髪の教官は、先程までの沈黙と明らかに異なるニュアンスで押し黙った。

リユミエールが視線を明るい空から下げ、淡い瞳で感性の教官を見遣る。

「リユミエール様」

タイム力が耐え切れずといった風に、気遣わしげにリュミエールへ声を掛けた。

「……貴方は優しいですね、セイラン。とても。」

「買い被り過ぎですよ。」

セイランは外方そつぽを向いたまま、リュミエールと目線を合わせない。

「というか、そこまで理解していらっしゃるのに、優しさを司る水の守護聖様のはずが、随分とまあ、夢を壊すようなことを。」

「夢を壊す、確かに。」

何が可笑しいのか、リュミエールは楽しげに暫く小声で笑った。

そうして笑い収めると、静かに目を閉じて、その表情に、ゆつくりと痛みを滲ませた。

「そうあらねばと、思います。……そうであらねばならなかったのです。本来ならば。もつと早くに。」

漆黒の宇宙そらの満天の星空の下、庭先へ出た。

冷え切った空気の中、天頂を見上げれば、あの日よりも早くに中天へ昇ったその小さく淡くも鋭い輝きがある。

ミザル銀河系。

あの銀河の光の中では、未だ敵意と憎悪とが渦巻き、その意志が着々と例のものの建設を押し進めている。

どうか争わないで。憎しみを誤った方向に向けないで。
目を閉じ両手を広げ、私から流れ出た水のサクリアは、天へ昇る途中で力を失って霧散する。

宇宙はあまりに広く、星はあまりに遠く離れている。永遠を思わせるが如くに。

未だ謹慎の身で、星の間への出入りは赦されていない。

優しさを届けたくとも、ここからでは無限とも思えるほどの隔たりがある、それでもなお意識を

集中させる。

あの銀河の光の中。あのアルゴールの蒼い光を意識に思い浮かべ。

長い時間、身体が冷え切っても。一心に。ただ一心に、このサクリアを。

だから気が付かなかった。近づく人影に。

唐突に背後から腕を廻されて、けれど驚くより先にその熱い気配の正体に思い至り、それから同調を図ろうとするその意図に気付いたから、再び目を閉じて集中を続けた。

彼の扶け^{たす}を得て、その炎の熱さが私の中へと流れ込む。漆黒の世界の中、閉じた瞼の裏で、視界が白熱する。オルバースの夜空のように。

私から溢れ出る水のサクリアが、一筋、二筋と、そして後から幾筋も幾筋も、星屑のような軌跡を描いて、天の高みへと駆け上っていった。

どうか優しさを。そして彼のような強さを。

……どれほど、そうしていただろうか。

身動きすらもしない彼の腕の中、背後から囲われたままの私の身体が熱い。

肩口に埋められた顔、髪。密やかに繰り返す呼吸。

片手だけ、あの指が、抱き締める位置からゆっくり私の腕を上り、微かに首筋を撫ぜた。それから髪を、一筋、梳いた。

離れてゆく最後の瞬間、耳元に触れた、唇の感触。

彼の気配が完全に消え去っても、長い間、動けなかった。

その熱が去り、もう一度身体が冷え切ってしまうまで。

彼の残酷さを思い知ったのは、未だこの身の謹慎の解かれない中、彼がかの惑星へ直接視察に向かうと人伝てに知らされた時だった。

4 アインシュタインの特異点

自邸から、小さな平面モニター越し、宮殿の星の間の光景を見る。

天井、壁、床までも、星の間の全方位に映し出される星空の、只中にまるで浮かぶが如き7人の守護聖の姿。

漆黒と星屑の中、彼らの前には赤色超巨星。その巨大な朱い光は落日のそれ。次の夜明けを、永遠に迎えることのない。

ひとつの星の生命が、今、尽きようとしていた。

銀河の数は兆を越え、そのそれぞれが千億の星を揺藍する。

生命を擁さぬ銀河には名すら無い、その名も無き銀河の中の、名も無き星。

女王にさえ、宇宙の果ては判らないのだという。

宇宙はあまりに広く百億光年を超え、女王陛下の不確定性原理を以てしても、その彼方を知ろうと思いいれば必然的に空間も時間も歪むからだ。曖昧になる過去、現在、未来の位置関係。

そんな歪みが、過去の女王候補、夢魔、未来の女王、聖獣、不死鳥、民の魂、それらの思念の通り道であるとも聴く。

星の様子は目紛るしく変化していた。

中心に近い側は次から次へと内部へ落ち込んでゆき、(C-O)と引出線で宙空に指し示されていた緑色の層が(Si)へ、そして(Fe)と書かれた青色の層へ変化する。それが即ち核融合の最終段階で、中心温度は加速度的に果てしなく上昇してゆき、その熱が外殻の(H_e)、(H)の層をどんどんと膨張させる。もともと大きかった星の外見が一気に更なる巨大化を遂げ、温度を感じるはずもないのに、熱ッ、という声がゼフェルの口をついた。

「わ……」

マルセルの言葉はそれ以上続かなかった。中心の青色のFe層が外層を巻き込みながら一気に収縮し、眩い白い光を発し始める。堪え切れないように上下方向へ細い光の筋が伸びてゆく。

次の瞬間、

「——!!!」

星は四散した。閃光を伴い、光速に迫る速度で彼らを突き抜け飛び去る無数の粒子を撒き散らしつつ。

目も開けられないほどの光の中、ランディやマルセルはその場にはない粒子圧に耐えるように思わず両腕で眼前を庇っているが、光、闇、地、夢の守護聖たちは慣れた様子の涼しい顔で、手を翳し、あるいは目を眇めて、星の変化をじつと見詰める。

見定めるのが困難なほどの光の中心で、一瞬、球形を形成し始めたかのような輪郭が、次の瞬間には中心からの黒い闇に飲み込まれた。唐突に生じた闇は撒き散らしたはずの光の一部を瞬間的に

飲み尽くし、別の一部の光をその無限の重力で引き止め、別の一部の光は宇宙の果てに向かって秒速30万kmの絶対速度で飛び去り、そして残った——その奇妙な姿が。

中心には黒い球。いかなる光も発しない、いかなる光も反射しない。吹き飛ばしたはずの種々の元素は再度その重力圏に囚われ、激しい速度でその周囲を巡りながら様々な色を発し、最終的に中心へと落ち込んでゆく——しかし、それら自身の姿も背景の星々も、まるで水晶球の外と中を入れ替えたように、漆黒の球の外縁に沿って奇妙に引き伸ばされ、歪んでいた。

「——これが、超新星爆発です。そして残されたこれが、ブラックホールです。」

いついかなる時でも冷静なはずの王立研究院主任研究者が、ほんの僅か、悼むような声音を帯びた。間を置かず、すぐにその声は普段の調子に戻る。

「星の燃焼とは核融合そのものです。生成された宇宙ごとに異なりますが、誕生直後の宇宙は大部分の水素と少数のヘリウム、ごく一部の他の元素から成っています。宇宙に均一に散らばった水素の雲は、時間を掛けて重力により——もしくは、守護聖様方から場に与えられたサクリアを核として——凝集し、水素からヘリウムを生成する核融合反応が開始されます。」

エルンストが説明しながら宙を軽く叩き、スライドが代わる代わる表示される。

「その後の運命は、星の質量次第です。軽い星ではこれ以上反応が進みませんが、重い星では反応が進むにつれて中心が凝集し、更なる核融合反応が引き起こされ、炭素、酸素、珪素、そして最終的には鉄を生成します。核融合によって凝集がますます進むと同時に、燃焼がより高温となるため外殻が恒星風によって拡大し、それぞれの元素が層を成して、巨大化と凝集とが同時に進むという事が起こります。これはごく簡略化した説明ですが、この状態を赤色巨星と言います。」

エルンストの説明は若い守護聖たちに向けたものだ。応えるようにマルセルが質問を投げ掛ける。「最終的に、つて、そこから先はどうなるの？ どうしてもつと反応が進まないの？」

「鉄より大きな元素の核融合反応は吸熱反応となるからです。つまり、核融合によって新たな熱を生成できなくなる、という事です。」

巨大な質量を持つ星が、核融合の生成熱で重力に抗し、自らを支えていたのに、熱を生成できなくなるとうなるか。それが、先ほど見ていただいた超新星爆発です。」

研究者の手の動きに応じ、スライドが新たな図に切り替わる。円の中心へ集中する矢印と、円の中心から外方へ発散する矢印。

「熱が生成されなくなると鉄が凝集する。そしてほぼ瞬間的に重力に押し潰され、鉄よりも遥かに高密度の中性子が形成されます。と同時に、この際にまた一部の熱が生成される。引き続き重力が働く。潰されてゆく元素は新たな中性子を生成し、あるいは中性子星として形成されつつある中心核に衝突し激しく反発する。爆発のメカニズムはこのようなものです。状況にもよりますが、形成された中性子星は一定の質量を超えると、その状態でも自らを支えることはできずに重力のみの力でただ一点へ崩壊します。これがブラックホールの形成です。ご覧いただいたように。」

黒い虚無は未だ星の間のスクリーン内、吸い込み続ける渦の激しい放射を伴いながら、それ自身は不気味な静寂を保っている。

「…宇宙の多様性のためには不可欠のことなのです。これは。」

この爆発によってその星自身の燃焼は尽きるのですが、爆発の際のエネルギーによって更なる核融合反応が起こり、鉄より重い元素を生成します。それらが星間に散り、未だ大量に残されている

水素の凝集、すなわち次代の恒星の形成と時を同じくして、その周囲を巡る惑星を、ひいては我々のような生命体を形成する。星の爆発なくして、複雑な生命の発生は有り得ないのです。……女王陛下は、おそらくその例外ですが。」

エルンストは、そこで思案するように一息入れた。

「恒星アルゴールも巨大質量星で、いずれは同様に崩壊すると見られています。元素分布からみて、当面は安定して燃焼すると考えられています。」

「この間の会議で言った真空崩壊って、これのこと？ 宇宙への甚大な影響って？」

「それはまた超新星爆発とは別の話になりますので、また今後、いずれ近いうちに、マルセル様。ルヴァ様か、もしくは私よりご説明申し上げます。」

「俺は要らねえからな。」

ゼフェルの言い草にランディが渋い顔をするが、このの方面に関してはゼフェルの方が詳しい事に否定はできないらしく、話を切り替えるように光の首座へ声を掛ける。

「オスカー様の惑星視察はいつ頃ですか？ ジュリアス様」

「用意出来次第すぐにでも、と申し付けてある。二・三日中には出立するだろう。」

「ジュリアスもクラヴィスも、それぞれ腰巾着がいなくなつてさぞ不便だろうな」

「ゼフェル！」

ランディが声を高くするが、鋼の守護聖は一向に介さず話を続ける。

「らしくねえ事したよな、リュミエールも。なんかオスカーみてえ。」

少し前にジュリアス様が私へ問うたことと、同じ。

ジュリアス様の厚意で赦されたモニター越しの視聴は一方通行で、こちらから何かを向こうへ告げることが出来ない。

「さしずめ、オスカーが妙なこと言ってリュミエールを唆そそのかしてもしたんじゃねえの？ で、追っかけてって止めておいて、今度は自分が上手いこと出張る、ってな。」

…そうではないのだと。

彼が視察へ行くと聞いた時、身体が震えるほどの激しい感情に揺さぶられたけれど、そういう理由からではないのだと、伝えることも出来ない。

「ゼフェル、お前！」

再度荒げたランディの声は、だが静かな低い声音に遮られた。

「あの行動は、あれが決めたことだ。そこに、どういう要因があるうともな。」

……クラヴィス様。

オリヴィエが闇の守護聖の言葉を追って話を続ける。

「まあ、リュミエールにしちゃ妙だった、ってのには同意するけどね。逆にあの子らしいな、っていうのも判る気がする。先の事まで考えれば、粒子加速器の建設が緒に就いたばかりのあの時が、後になってみれば一番最小限の被害で済むタイミングだったのかもしれない、ってね。あんたたちにとっては意外な一面かもだけど。」

………。

私と同じくして押し黙ったゼフェルが、ややあってから渋い顔で疑問を呈した。

「…だいたいよ、粒子加速器の建設やら稼働やらを止めに行く交渉に、なんでオスカーが行くん

「よ？ 火に油、じゃねえ、星に炎を注ぎに行くようなもんじゃねえの？」

「そもそも粒子加速器の建設停止を要請するのに、真空崩壊の危険性について説明ができる人間じゃないと駄目でしょ。これでマルセルはアウト、ランディも怪しい。ルヴァはその2人に取り急ぎ講義する必要があるし、私は例の惑星へのサクリア注入役。リュミエールの水の分も夢で補つとくためにね。残りの御大らに比べれば、まあ、オスカーの方が使節としては妥当じゃない？」

「俺なら惑星の連中に説明できるぜ？」

「宇宙の命運がかかってるかもつてのに、短慮の塊みたいな奴に任せらんないでしょ」

「なんだと！」

「アンタ、これ系の知識は飛び抜けてるし、今みたいに誰かがいなくなるとすぐ人手に困るんだし、早く大人になってよ。いい守護聖になるって期待してんだからさ。」

オリヴィエに逆にしんみりした調子で言い返され、ゼフェルは言葉を失った。あまりこういう事を改めて言わない人だから、ゼフェルには堪えたかもしれない。

「…オスカーが、惑星視察を申し出た際にこう言った。意味はわからぬが」

唐突に、それまで沈黙していた光の守護聖が話し始めた。

全員の、そして私の意識がそちらへ集中する。

「……『俺の責任ですから』、と。」

「……………」

久し振りに見た。

あの夢だ。

最初にこの夢を見始めてから、ずいぶんと長い時が過ぎた。

——それが何故なのか、今は臆げに判り始めているような気がする。

「ランディ！ ゼフェル！ ほーらあ、早く行こうよー!!」

晴れ渡った空の下もとの青い草波の、少し離れた先で、今にも駆け出しそうな兎のようにマルセルが跳ね回っている。

「け、やっぱガキだな。あの燥はしやぎっぷり。」

「よーし、湖まで競争だ！ 負けないからな、用意、スタート！」

「あ、このやるテメー、ずるいーぞ！ 待ちやがれ！」

土煙を巻き上げそんな勢いで、あつという間に2人の背中が小さくなっていった。その光景にくすくすと笑っていたティムカの腕を、がし、と別の腕が捕らえる。

「ティムカさん、ユーイさん、僕たちも行きましょう！」

「おう、望むところだ！」

「え」

言うや否や、メルとユーイは左右からティムカの両腕を引っ張って駆け出した。ティムカのあの衣装が引っ懸からなければいいが、気をつけろよ、と胸の中で呟く。

「若い者たちは元気ですな」

「全くです。」

眼鏡のブリッジを片手の中指で上げながら薄く応えたエルンストに、

「どうですか？ 我々も彼らに倣ってみますか？」

良くも悪くも聖地慣れしてきたヴィクトールがさも楽しみに持ち掛けて、エルンストの生気が停止した。

「……折角のお誘いですが、普段から身体を動かしている貴方と違って…申し訳ありませんが、ご遠慮しておきます」

しばしの無言の後、あくまでも生真面目一本で辛うじてそう答えたエルンストに、ヴィクトールがからからと高らかに笑った。

どこまでも突き抜けて宇宙に届きそうなほどの深みを持つ青い空の中を、輪郭のくつきりとした大小の白雲が3つ4つ、ゆっくりと流れていた。

「にしても、オスカー、あなたが一月も前からこんな行事を計画するなんて、ずいぶんと珍しいですねー。あの立派な招待状をいただいて、その案内がピクニックだと確認した時は驚きましたよ」雲と同じくらいのおんびりとした口調でルヴァが話し掛けてくる。

「たかがピクニックでも、そのくらいの計画は必要だろう。これだけの人数だと」

「まあ、それはそうかもしれませんが。なにしろ」

神鳥の宇宙と聖獣の宇宙の、女王陛下、補佐官、守護聖、その双方の宇宙の架橋となった^{エトワール}聖天使、ここまで数えて23人だ。

「……なんでも、彼にも招待状を送ったそうですね？」

「一応な。相変わらずどこににいるか見当もつかないが、一応王立研究院に依頼しておいた。」

「あなたにしては、本当に珍しい。」

「折角の機会だしな」

「まるでリュミエールのような事を言うんですねえー。あなたが」

そう言って、ルヴァが笑顔を綻ばせた。

少し後ろを歩いていたリュミエールの方を振り返れば、明るい陽の下で、リュミエールは俺へ向かって笑っている。

とても幸せそうに。

「この青い空には」

深い色をした頭上の空を見上げて、その蒼天の青を海色の瞳に映しながら、リュミエールが語る。

「見えないけれども、夜と同じように数多の星々が輝いています。そして」

「恒星の終末、超新星爆発の時には、星は数日に亘ってそれまでの何百倍にも輝き、昼間の空でもその煌めきを目にすることが出来る。そうだな？」

「ええ。その通りです。」

細い月が中天に見える他は、当然のように星も見当たらない、いつもの聖地の青い空だった。新月に近いから今日の夜は星空が良く観察できるだろう。

視線を下ろしたリュミエールは、少し暑さを感じる日差しにやや頬を紅潮させ、再度俺へ笑いかけた。

「ありがとうございます、オスカー。こんな機会を作っていただいて。とても楽しいです。…とても。」

「まだこれからだろう。湖畔に着いてもいない。楽しんでもらえているなら何よりだ。」

そう返事したら、リュミエールは屈託の無い笑顔を見せてから、年少の者たちを追いかけて走り出した。入れ替わりにオリヴィエが近付いてくる。

「リュミエール、いい表情してるね。お手柄じゃないの、オスカー」

「もつと褒め称えてくれてもいいぞ」

俺の責任だからな、とは言わずに。

「……アリガト。私からも、礼を言うよ。」

思わずと言った風にしんみりしそうになる悪友の後頭部を叩き、^{はた}甲高い怒声を背にして俺も思い切り走り始めた。

湖畔まで着いてみれば、そう運動には強くないゼフェルは木陰でぶっ倒れていて、リュミエールがタオルだ水だとかまごま介抱してやっている。こちらはぴんぴん元気なままのランディとマルセルが、聖獣の宇宙の年少組と協力して気が早くもバーベキューの準備をしているが、慣れていない奴がやると炭に充分な火を熾すまでに意外と時間が掛かるから、昼には丁度いい程度かもしれない。聖地の風光明媚な湖畔の脇に立つログハウスは光の守護聖の所有する別荘で、建物の収容力もレクリエーションに興ずる敷地も充分にあり、こういう機会にはこれまでも何度か使わせてもらっている。到着したジュリアス様に改めて礼を申し述べ、持参した物品と置き用具とを持ち出して、今日一日を過ごす用意を始める。

油断していたら、到着したオリヴィエに背後から頭を叩き返された。

「すごくいい天気だけど、今日みたいにずっと外にいるとちよつと暑く感じるね。なんだか太陽が近くなつたみたいだ」

とランディが、準備を進めながら太陽を仰ぎ見てそう言えば、

「けっ、んな訳あるか」

と休んでいた木陰から、わざわざゼフェルが茶々を入れる。

「太陽っていえばさあ」

「またもや言い争いに発展しそうだった気配の2人をさつくりと無視して、マルセルが無邪気に切り出した。高くてよく通る声は周囲の耳を自然と集める。」

「ぼく、ずっと不思議に思ってたんだけど。太陽って、宇宙の中に浮かんてる恒星なんだよね。そして主星が惑星で、自転しながら、太陽の周りを公転してるんだよね？」

「？　そうだけど？」

「それで、聖地は外界と隔たりがあつて、主星の他の場所とも時間の流れが違つてて、外界のほうが時間の流れがずっと早いんだよね？」

「？？　それがどしたつてんだ？」

「じゃあ、聖地の太陽って、どうしてぼくらが感じる一日に1回、昇つて没むの？　主星の他の場所だと、もっと早い周期で昇り没みしてるつてことだね？　ぼくが見てるあの太陽って、いったい何の姿なの？」

「それまで恐縮する守護聖たちを尻目にきやつきやと食材の準備に興じていた4人の少女たちが、その言葉に、がつ、と音がしそうな勢いで振り向いた。視線に気付いたマルセルの腰が無意識に引ける。」

「それはねえー、」

「代々の、宇宙の女王と、」

「女王補佐官だけの、ですわね、」

「秘密、だヨッ☆」

この上なく美しく清らかな4人の笑顔の、有無を言わさぬ絶対的なその圧迫感に肝が冷える。顔を青くしたマルセルがこわばった笑顔を返し、小さく「は、はい」と呟いた。

この件に関してだけは俺にも皆目見当がつかず、やがて諦めてからはあえて意図的に考えないようにしている。

「王立研究院では、仮説がなくもないのですが」

つい最近までその主任研究員だったエルンストが、懐の端末を取り出してメモらしきものを見ながら話し始めた。

「相対性理論によりますと、いかなる情報も光の速度を超えて遣り取りすることは出来ない、とされています。例えばですが、あの太陽の光。あの太陽までは1天文単位相当の距離があるため、太陽から発した光が主星へ届くまでに約8分を要します。今この瞬間に太陽が消滅したとしても、8分後まで我々はそれを知ることが出来ないわけです。同様に、」

エルンストはそこで一息置いた。

「我々と事象との間に、通信が不可能なほどの隔たりがあれば、そこで起こっていることと我々に起こっていることとに関連性があるかどうかを確かめる術は永遠に存在しません。極端な話、そこらとこちらで時間の流れが同じかどうか、空間に連続性があるかどうかすら判らないのです。そこで研究院では、聖地と外界との間に、通信を不可能にするようなこういった境界が存在すると見ています。すなわち外界の主星の太陽と聖地で見られる太陽との時間の流れが、同一のものであるかどうかを計る術がないような境界が、です。」

「すごい！ よくわかんないけど、それで説明できるんだね？」

「いえ、残念ながら、この理論では不完全と言うしかない代物でござりました」

微妙に語尾がおかしいし、震える手で内ポケットに仕舞ったつもりの端末は滑り出て草の上にぽとりと落ちた。

さしもの理論家にも、この領域はアンタツチャブルであるらしい。

薄ら寒い顔を見合わせた後で、その場の全員が俺と同じようにそれ以上の追求を断念した。

「さて」

昼の準備にも充分な人手が戻ったのを確認してから、俺は少し傾斜を登り、見晴らしのいい樹の下の葉陰が作り出す程良い半日陰に寝転んだ。

「オスカーさまあー」

湖畔からメルが手を振っている。

「なにしてるのぉー？」

「ちよつとな。昼寝だ。」

がばりと身を起こして反応したのはゼフェルだ。

「はあー!? バカじゃねえのぉー!? こんな所までわざわざ来ておいて昼寝かよ!？」

今の今まで転がっていたお前に言われたくはない。

「これも大事な要件でな! せいぜい俺の分も働いておけよ!」

別方向で、オリヴィエがこちらを振り向くのが見えた。その怪訝そうな表情の細かい所までがは

つきりと見て取れそうだった。周囲の人間に声を掛け、小高くなったこちらに向かってくる。

リュミエールは、こちらの事も気に留まらない様子で、守護聖たちの輪の中で和やかに笑っている、その姿をもう一度、目に映した。

オリヴィエの気配が近づくのを感じながら、頭上の葉擦れに目を遣る。鮮やかな新緑、その向この青い空、白い雲、太陽の光、そして見えなくても、空の彼方で輝き続ける星々。

「オスカー」

視界の中に金とピンクの髪が加わる。膝を付いて覗き込むその姿に、夢を見始めた頃のあの時の目覚めを思い出した。もう遠くの昔。

夢の守護聖の逡巡は、言えるものなら、やめなよ、と言いたいのだろう。夢なんてどうでもいいんじゃない、と。懐かしいあの頃のように。

「心配するな」

手を伸ばして前髪を撫でたら、オリヴィエは泣きそうな顔をした。

「俺の責任だからな。必ず、俺が救ける。」

謹慎の解除であろう、と予想していた。オスカーが発った後だったからだ。

人員を2人も欠いたままでは、守護聖たちの執務が滞ること甚だしい。

だが邸外から聴こえてきたのが、馬車でなくゼフェルのエアバイクの音であること、それもかなりの速度を出してきたのだと気付いて、自室から飛び出て玄関から屋敷の外へ出る。

「乗れよ」

素早くヘルメットを渡してきて再度バイクに跨るゼフェルに、無言で何があつたのかを問うた。

ゼフェルは私の視線から目を逸し、一瞬だけ逡巡した後、独り言のように呟いた。

「オスカーが、……惑星で軟禁された。」

大丈夫か、と顔色を心配したゼフェルに問われるが、頷いて眩暈う視界をすぐさま振り払い、後部席に乗った。

「俺さあ！　ちよつと判った気がすんだけどよお！」

王立研究院に向かう途中、最高速度でバイクを飛ばすゼフェルが叫んだ。

「危ない目に遭うんならさ、自分がその立場になった方が、よっぽど気が楽なのな！」

何を思つての発言だったのか。

しかしその言葉は、私がずっと考えていたことそのままではあつたから、無言で同意を返した。

王立研究院に駆け込めば、中空のモニターを守護聖たちが取り囲んでいる。映像は酷く乱れ、かなりの遠くのアンゲルから室内の複数人を映していて、だが中央で他の者に囲まれて立派な造りの椅子に掛けている姿が、オスカーその人なのだと不思議とはつきり見て取れた。

「惑星側の王立研究院分院が政府関係者によって制圧され、次元回廊のゲートも切断されました。惑星は火山帯と海溝の起伏が甚だしく、王立研究院以外の場所へ次元回廊を開くことが著しく困難で危険です。映像は政府機関の建造物内のもので、正規の監視モニターからではなく、電磁波や粒子波を傍受する形で辛うじて室内の様子を捉えています。」

エルンストが必要最小限の情報で今の状況を説明してくれる。彼も最近は神鳥の宇宙と聖獣の宇宙とを行き来する事態が生じて忙殺されているから、こちらの宇宙にいてくれる時で良かったと思う。

これもまた酷く乱れて聞き取りづらい音声が流れるが、沈黙を破るその切り出しは紛れもない、オスカーの声だった。

『それにしても、女王陛下に弓引くとは。ただで済むとは思っていないだろうが、一体どういうつもりだ？』

『弓引くなど。そのような恐れ多いことを、よもや。』

先ほどもお知らせしました通り、王立研究院が不測の事態で現在のところ機能を停止しており、炎の守護聖様と、他室にてお控えの随身の皆様とに於かれましては、次元回廊の復旧までごゆるりとお過ごし頂ければと。我が国を挙げて歓待申し上げます。重ね重ね、他意はございません。

ん。』

『では、宇宙艇を用意しろ。ここにこれ以上、用は無い。くだらぬ追従と招宴だけだったな。』

『それも叶わぬことで。現在、我々の惑星は複数の国家が非常に緊迫した情勢に至っております。宇宙港、星間航行の利用は他国からの攻撃の恐れがあります。守護聖様をそのような危険に晒すことは、とても。』

『その情勢のそもそものは、あの粒子加速器の建設に関わることだろう。守護聖に刃を向ける物好きは貴様らの国くらいだ。力づくでここを出て、俺が王立研究院でも宇宙港でも復旧させてやればいいのか？』

『ご随意に。いざとなれば、我々もろともこの建物を破壊するよう既に命令を出しております。守護聖様のお命をみすみす失うことは、いかにその守護聖様自身のご決断と言えど、我々が宇宙の尊き女王陛下がお許しになりますまい。』

『我々が宇宙、か。聞いて呆れる。その宇宙を危険に晒す真空崩壊の可能性についてはどう考えている。未だ粒子加速器の建設は、むしろ勢いを速めて進行しているらしいが。』

『可能性。まさにそれでございます。お話を伺えば、真空崩壊に至るエネルギー値については推測でしかないとのこと。一方で我々は、火山と海洋に囲まれて活用が困難な狭小な土地しか持たず、他国と渡り合える技術力を得るためには、あの粒子加速器の完成と、その成果に掛けるしか道は無いのです。』

『…どれだけ話しても無駄なようだな。』

『お話し相手でしたら、いくらでもどうぞ、お相手いたします。それで時間が経過するのであれば。』

全ては順調に進んでおります。

我々は、ただ、時間さえあればよいのです。』

それを限りに室内には再び沈黙が訪れ、気を利かせたつもりか、オスカー以外の惑星の人々は室内を去った。

彼の沈黙が私たちに刺さるようだった。対照的に、映像と音声のノイズがひとときわ酷くなる。ともすれば消えそうになる彼の様子に神経を^{そはだ}忸てた、その時だった。

彼がこちらを振り向いた。

私達の事が伝わっている筈もないのに、振り向いて、その氷青色の瞳で私を見た。

唇が動く、ノイズに埋もれて殆ど聞き取れない、しかし私にはまるで耳元での言葉のように、

『リュミエール』

はつきりと、彼のその深い声が脳裡に響いた。

彼は、その瞳で、私を見据えて、言った。

『……炎を消せ。』

お前にしか、出来ない事だ。』

遠く離れた私の心が、遙か深くの彼の底へ落ちていった。

……オスカー。

もう、逃れようがなかった。

特異点のような貴方の元へ、私の存在の全ては落ちていく。

ふと、彼が笑った。

これまでの彼らしくない、優しい微笑みだった。

『夢から覚めたか？』

たぶん、と私は心の中で答えた。

『俺は覚めた。』

彼も答えた。

必ず。何があっても。

貴方は、必ず、私が救います。

5 シュヴァルツシルトの地平線

シュヴァルツシルトの地平線を越えたものは、何であろうと、宇宙で最も速い存在である光です。でも、その重力から逃れることは出来ない。

貴方という存在に、もはや永遠に捕らえられた、私のように。

「……オスカー？」

…木漏れ日とともに、優しい声が降ってくる。

瞼を開き、膝を付いて覗き込むその水色の姿を目にした。

「…夢から覚めましたか？」

柔らかく優しい笑顔で、俺に問う。顔を少し傾け、肩から青銀の髪が流れ落ちた。

ゆっくり上半身を起こし、どうやら正午を過ぎたらしい、周囲の明るい光景を再度見回す。湖畔から立ち昇る煙と賑やかな歓声とが、昼食の用意の整ったことを知らせていた。

立ち上がり、同じく俺の傍らに立ったリュミエールと視線を合わせ、俺も微笑んだ。

「多分、まだ、覚めていない。」

目を軽く見開くリュミエールに、続けて言った。

「…今日はまだ、な。」

しばらく表情を変えずにいたリュミエールは、やがてゆっくり顔を綻ばせて、手を伸ばし、俺の頬にそっと触れた。細くて柔らかい、そのゆびさきの、温かさ。

あの新年の儀の、凍えるような雪の夜。

「……なんだか、とても不思議な気分です。…貴方が、こんなに私の近くにいるなんて。」

海の色虹彩には俺の姿が映り、その瞳の奥の晦冥は宇宙の漆黒を映し出している。

俺も手を伸ばし、リュミエールの頬に触れた。唇が物言いたげに緩く動いた。

「あー！　なんかやらしいことしてるー！」

メルが目聡くまたもや遠くからそう叫んだから、リュミエールに触れたまま湖の方を見、声を張り上げて返した。

「羨ましいか!？」

途端にきやああ、ぎえー、えええええ、うおおお、と複数の声上がり、俺もリュミエールも、堪えきれずに思わず笑い出した。

心ゆくまで、この世界を享受すること。

それが、今の俺の成すべき最大で最善の事だった。

『炎を消せ』

…彼の言葉は、何を指していたのか。

粒子加速器の本格稼働は、何を持ってしても止めなければならない。人類を、果ては宇宙を滅ぼす火を、それが牙を剥く前に絶対に消さねばならない。

けれど私達は、オスカーの存在を人質に取られたも同然だ。聖地側の怪しげな動きはすぐさまオスカーの身の危険となつて彼に降りかかる。

あるいはそのオスカーの言葉は、彼自身の命を犠牲にしても、必ず成し遂げろ、という事なのだろう。彼の言葉、彼の事だから。

『お前にしか、出来ない事だ。』

そうだ。私ならやるだろう。誰が反対しても、何があつたとしても、それが何よりも彼の望みであるのなら。

宇宙の存在と同じ重みで、彼の信頼が私の上にあつたのだと、こんなにも永い間、彼と果てしなく隔たり擦れ違つてきたのに、今この時に初めて気付かされて涙が出そうだった。

だが泣く暇も、立ち止まる暇も一瞬たりとて無い。命を懸けた彼の信頼があるからこそ、だからこそ何があつてもオスカーを救けると決めたのだから。

考える。宇宙を護る方法を。オスカーを救う方法を。

オスカーの命が相手方に握られている以上、救出に至るまでの事は一瞬で片付けなければならなかった。この点で宇宙艇を使う方法は検討外だ。聖天使の任務も終わりに近付エトワールいているが、いかに最新鋭の高速艇を使用したところで、惑星に接近し、着岸し、オスカーの下もとへ行く行程は余りに悠長過ぎて、とうてい彼の身の安全を保証できるものではない。

となれば、女王陛下の御力をもつてして次元回廊を惑星へ開くしかない。これを妨げるのが惑星の活発な火山活動で、起伏が激しく、また溶岩とともに地中から吹き出る水蒸気の蓄積のため海洋に富み、平坦な土地を極端に欠き、国家間に争いをもたらず、それら全ての原因だったが、この火山活動には成因となるこの惑星特有の理由があった。

惑星のごく近傍に、生命体は無いもののこの惑星とほぼ同格の大きさの連星惑星があり、両惑星が近距離で強く引き合っているために生ずる甚大な潮汐力が、まるで煮立ったスープのように惑星の地殻を乱し、熱を生じさせているのだった。この連星さえ無ければ惑星の火山活動も地殻も地磁気も何もかもが安定し、女王陛下はオスカーのすぐ横にでも次元回廊を開くことができるだろう。

(だが)

いかな女王陛下、いかな守護聖といえども、惑星まるごとひとつをどうするというのは思考の埒外だった。惑星に対するサクリアの作用は時間を掛けて浸透するものであって、宇宙の真空をその質量で捻じ曲げながら動き続ける巨大な塊の前では無力に等しい。

『炎を消せ』

彼の言葉が脳裡で再生する。

私を見据える、その瞳。

その氷青色の瞳の色が、アルゴールの燃え盛る蒼い炎の光と重なった。
心が跳ねた。

(……まさか。)

瞬間的に星図を頭に思い浮かべ、条件が全て整っていることを確認して身体が震える。

恒星アルゴールの自転の軸、すなわち地軸が件の惑星くだんの方向へ向いていること。

と同時に、真空崩壊を避け、粒子加速器を安全に消滅させる、最も単純な方法。
シュヴァルツシルトの地平線。

いかにサクリアが、巨大な岩の塊に対して無力であっても。

それより遥かに莫大な質量を有するものが対象であれば、ほんの少しの作用を与えてやるだけで、それ自身の重力そのものが容易に一連の反応を引き起こす。

特異点は、ただひととき、ただ極小の一点に在りさえすればよい。後は重力が、宇宙のその他のあらゆる力を圧倒して、質量を崩壊に至らしめる。

そしてその過程において、莫大なエネルギーを放射する。

脳内でもう一度条件と状況を洗い直し、

「エルンスト！」

私の上げた声で皆の注意が一斉に集まる中、エルンストにその案を手短に提案し、実現可能性について問うた。

エルンストは暫く、彼にしては随分長く絶句し、

「……少し…計算させてください」

即答を避けた。すぐに机上の端末に向かう。

「手伝うヨ」

いつの間にか、こちらの宇宙に来てくれたらしいレイチエルがエルンストの横に座った。

室内を見回す。オスカーを除く神鳥の宇宙の守護聖、幾人かの聖獣の宇宙の守護聖、補佐官、女王陛下。

「危険です、リュミエール。オスカーが、ではなく、それを実行する者が、です。」

ロザリアが私に近付き、流星のひとつと言ふべきか、声は冷静を保ちつつ、しかし青褪めた顔は隠し様なくそう意見を述べた。

「判っております、ロザリア。元より余人に任せるつもりはありません。」

「リュミエール、勝手はならぬ」

「リュミエール様」

複数の発言に被さつてその後が続いたのは、夢の守護聖の声だった。

「言つても無駄でしょ。この子の強情さは皆んな嫌つてほど知つてるでしょうに。」

オリヴィエ、と声を掛けたら、彼は私に笑顔を寄越した。いつもの彼らしい、この世界に大変な事なんて何も無いんだよ、と感じさせてくれる、軽やかな彼流の笑いを。

「その代わり、必ず帰ってくるんだよ。こっちはオスカーの馬鹿をとつとと連れ戻して待つてるからさ。」

私は、ただ微笑つて応えた。

「エルンスト」

そうして、席から立ち上がった彼に声を掛ける。

「可能です。」

それが彼の回答だった。

喰って、飲んで、喋って喋って、笑い、軽口を叩いて、罵り、喰って、また笑って、戯^{じゃ}れて、走って、湖に突き落とす、怒鳴られて、飲んで、笑い、引っ張られて、突き落とされて、濡れて、怒鳴って、また笑って――

そうして、陽が少しずつ傾いてゆき、少しずつ赤みを重ねてゆき。

あの太陽は、また明日の聖地で、いつもの夜明けを迎えるのだろうか。
それとも――

「私たちがずっと危惧していたこと。真空崩壊について、お話したいと思います。」

室内の、限界まで落とされた淡い照明の下、地の守護聖は語り始めた。

「真空、とは、宇宙を構成する最も単純な空間。一般に、ただ何も無い場所、と解釈されていますねえ。しかしながら、えー、一番最初の講義でしたでしょうか、」

ふたつの姿へ、問うように、思い出すように語り掛ける。

「不確定性原理により、とても小さな領域、ほんの短い時間であれば、何もない空間から様々な素粒子がエネルギーを得て生成され、また消えてゆく。何も無い空っぽの空間のように見える真空も、微小領域ではそのような仮想粒子が生まれては消えてを繰り返す、沸き立つような世界であると考えられています。」

これらの真空は、一時的にエネルギーを得てはまた元の、『ただの』真空に戻る。……では、ですね、」

地の守護聖は、問うた。これまでの、いつもの彼の講義のように。

「我々が現在、存在しているところの、この『ただの』空間は、本当に『ただの』空間なのでしょうか？」

一時的にエネルギーを得ては崩壊する、その、一時的、が極端に長いだけの、『仮の』空間である可能性は？」

理解を待つように、地の守護聖は時間を置き、口調をやや改めて再び話し始めた。

「一時的に安定しているものが、長い時間の後に崩壊すること。これは何も、珍しい特殊な現象ではないのです。」

例えば、放射性崩壊です。例を挙げれば、ウラン²³⁸。これは陽子が、ええと、92個に、中性子が146個から成る元素ですが、たいへん重い元素のため、陽子・中性子同士の結合に不安定性があり、その不安定性がある一定のラインを超えた時、トリウム²³⁴とヘリウム4とに崩壊します。

その期間、すなわち半減期は約45億年。

ウラン²³⁸のうち半分は45億年より前に崩壊しますが、残りの半分は45億年経っても何ら変わりないウラン²³⁸のままなのです。とても長いですよねえー。ある期間を切り取れば、ずっと安定して存在している元素とみなされるかもしれません。」

地の守護聖の口調は、こんな時であつても静かで、長閑のどかですらある。

「あるいはまた、原子スペクトル、です。」

えー、ご存知のように原子とは、陽子と中性子から成る原子核の周りを、電子が巡っている、という構造のものです。電子は普通、基底状態と呼ばれる最もエネルギーの低い軌道を巡っています。が、外部からエネルギーを得るとそれを吸収し、一時的に高エネルギーの軌道へと遷移します。励起状態と呼ばれるものです。

この状態、励起状態で原子はしばらく安定している。しかしやがてある時に、電子のエネルギーのゆらぎが境界を越えると、安定した時間は終わりを告げ、遷移状態から基底状態への差分に相当するエネルギーを光として放出し、原子は元の基底状態に戻ります。この遷移状態から基底状態へのエネルギー差が原子ごとに異なるため、原子はそれぞれに特徴的な波長の位置での強度を持つ

光、すなわち輝線を示すのです。これが、原子スペクトルです。一部の金属元素では、この原子スペクトルが、各々の元素に特徴的な炎色反応として観察されるんですよ。」

聞き手の二人は沈黙を重ねている。一見和やかな、その話の続きを待つ、あるいは恐れるように。「同様に。……私たちが住んでいる、この宇宙、この空間そのものも。真に安定した基底状態ではなく、準安定的なだけの励起状態が、ただずつとずつと長い間続いているがために、そうとは気付かれないだけではないのかと、そう考えられています。」

たとえこの真空の安定が、仮の安定であつても、それがこれまでずつとずつと長い間続いてきた、それもその真空の中に、恒星の核融合反応ですとか、ブラックホールの形成ですとか、そういう激しい反応を幾つも抱えていながら空間そのものはずつと存在し続けてきたわけですから、仮だとしても相当に安定しているとは言えますよねー。

ただ、どれほど高いエネルギーの下でも絶対に安定している、とは、言い切れません。

……極端に高いエネルギーが、例えば、粒子加速器などによつてただ一点に極大のエネルギーが集中すれば、そのエネルギーにより、現在の励起された真空が準安定状態を越え、基底状態の真の真空へと相転移する可能性が指摘されているのです。

これが、私たちの恐れている、真空崩壊です。」

地の守護聖は、それを限りに沈黙した。しかしやがて再び、静かにその語りの先が続く。

「励起状態の真空が崩壊し、基底状態の真空になると、どうなるか。」

どちらの真空も、ただ何もない空間、というのは共通しています。

しかしながら、励起状態の真空が崩壊して基底状態の真空が現れた途端、基底状態の真の真空は

周囲の励起状態の真空を次々と巻き込んで連鎖的に崩壊させ、それまで空間に在ったいかなる物質をも、その相転移の狭間で消滅させながら、光の速度で宇宙中に広がる、と。

…まるで、ただ一点に生じたブラックホールの特異点が、後は重力の任せるままに辺りの全てを飲み込み、破壊し、光ですら二度と外部へ出ることの叶わないシュヴァルツシルトの地平線の中へ完全に消し去るのと同じように、

……いえ、真空崩壊の方が遥かに悲劇的ですねぇ。なにしろ、それ自身は動かないブラックホールと違って、真の真空はいかなる限界も境界も無しに宇宙の全てへ拡がり、宇宙の存在そのものが、真の真空の泡の中へ全て消え去るのですから。

そのようにして、真空崩壊は現在の宇宙そのものを消滅させることになる、そう考えられます。」

辺りの景色は夕焼けに包まれ、空は地平線から遙かに駆け上がる赤から紫紺のグラデーションを描き、天頂は宇宙本来の漆黒の色を帯び始めた。

皆は昼の間に散々食べて騒いで、夜は夜でエルンストが肝煎りで手配してくれたイベントが控えているから、それまで軽食で済ませつつ光の守護聖の別荘の室内で思い思いに寛ぎ、何人かは体力を使い果たして仮眠を取っている。

少し冷えてきたけれどもまだ暖かい風の吹く草波を歩き、坂を登って、その場所に辿り着いた。

見下ろす湖面には、没みつつある太陽から反射する幾千もの光の煌めきが絶え間なく踊り続けている。

リュミエールの後ろ姿は、長い間、没みゆく陽と湖の煌めきを見続けた後、やがてゆつくりと空を見上げた。

「星が見え始めたな」

「ええ。」

俺の気配に気付いていたリュミエールに歩み寄って横に並び、俺も宇宙を見上げた。まだ蒼みの残る天空に、輝き始めた小さな光たち。

その光の名前を、ひとつひとつ思い出す。恒星、あるいは星団、あるいは銀河、銀河団。

「小さな光。…それは星であったり、星団であったり、銀河であったり、銀河団であったりします」

けれど。

私たちを擁する広大なこの惑星、それを擁する更に広大な恒星系、その恒星の集合であるところの星団、更には銀河、果ては銀河の集まりである銀河団。

……気が遠くなるようなその広大な光の集まりが、あのほんの小さな光であることも。

銀河団の中の数百、数千個の銀河の、その中のたったひとつの銀河、その中の千億の恒星のうち
のたったひとつの、更にひとつの惑星、その中の小さな小さなこの場所に、

視線を下ろしたリュミエールと、見詰め合った。

「貴方とふたり、こうやって共に在ることも、とても……」

不思議ですね、と言おうとしたのだろうか。

言葉が続けようとした唇は、それ以上動かなくなった。

「今日は楽しかったか？」

代わりに、俺が尋ねた。リュミエールは軽く目を見開いて、それから綺麗に笑った。

「ええ。とても。本当に、ありがとうございました。オスカー。」

憂いのない、純粋なその瞳。

もし、願いが叶うのなら。

「もし、……お前が望むのなら、」

リュミエールの手を取った。温かい掌。表情が軽い驚きに変わる。

湖から風が吹いて、リュミエールの長い青銀の髪が舞った。

「このまま、この暖かい世界で、お前と二人、こうやって共に在りたい。……いつまでも。」

そう告白した。

目を見張るリュミエールの、心が跳ね、揺れる様子が、手に取るようにはつきりと判った。そして、長い逡巡。俺の目を見詰めたまま。

この世界が、いつまでも在るのなら。
その長い時を、お前と二人で。

だがその深海色の瞳は、やがて静かに伏せられて。

「……ごめんなさい」

穏やかな声音は悔恨の色を帯び、俺にそう告げた。

緩やかに、暖かい風が再度吹いた。

「……判った。」

「……すみません」

「謝るな。そうじゃない。確信した、という意味だ。」

弾かれたようにリュミエールは顔を上げ、俺を見て、そうしてからまた目を伏せた。

「……ごめんなさい」

紛れもない、罪の告白。

「謝るな」

緩く抱き寄せて、頬に手を添え、その唇にキスをした。

一度きりの、触れるだけのキス。少しだけ長く。

リュミエールが細く、ゆつくりと息を吐いた。

唇を離し、腕の中にその身体を囲う。滑らかな髪に顔を埋め、視線を上には伸ばせば、もうほとん

ど陽の沈んだ空に、さつきよりも数を増した星々の光。

風は相変わらず、暖かく。

「もう少しだけ、……このままで、いさせてくれ。」

リュミエールは少し冷えた身体を震わせて、それから俺に身を擦り寄せた。

それもまた、ただ一度きり。

この暖かい世界は、お前の存在があつてこそ。

何もかもが暖かく優しい世界の中、腕の中のリュミエールだけが、実在の仄かな冷たさを持つて存在していた。

6 ホーキングの粒子線

満天の星空。

月も無い、絶好の観測日和。

「ようこそ、天体観測会へ。王立研究院の最先端技術の総力を挙げて、皆様を深遠なる星の世界へとご案内いたします」

自然の星明かりと人工の薄明灯の下で三々五々に守護聖たちの集う中、皆の正面に立つエルンストは平然とそう言うが、これを普通の天体観測と呼んだら各星系の天文学会から凄まじい量の異論が押し寄せるだろう。

ごく普通の見た目、ごく普通の大きさの天体望遠鏡も一応ありはするが、広い芝生のあちこちにその他所狭しと並べられているのは、ただの天体観測に用いるとは到底思えない謎めいた見た目の機器ばかりだ。初期の蒸気機関のような武骨な配管だらけのもの、広げられるだけ広げたパラボラに申し訳程度の小さな観測窓が付いているもの、先端が細く窄まった、巨大なドラム缶のようなもの、宙に向けた長い長い長い2本のアームをL字型に接続しているもの。機器の間を縫うようにしてそれらの細部をいちいち見て回っているゼフェルは、うへえ、とか、馬鹿じゃねーの、とか呟いていて、おそらく通常の天体観測に軽々しく用いるような簡単な技術ではないと機構を理解しての

発言であるからして、つまり一種の褒め言葉ではある。

「では早速、これからご覧ください。」

そう言つてエルンストがまず案内したのは、いくつかの普通の天体望遠鏡だ。

「えー、これ三日月？」

早速そのうちのひとつを覗き込んだマルセルが声を上げる。

「月、出てねえよ。主星系の内惑星だろ。太陽に向いてる面が満ち欠けして小っせえ月みたいに見えるの。習つたろ。」

「あ、なるほど」

「こっちは天の川だね。たくさん星が見えるよ。」

自らが所属する銀河の中心方向は多くの星が集簇し、そう呼ばれる。

「星に棲む人々は、技術の黎明を見るまでの長い間、肉眼のみで、あるいはレンズの機構を見出してからは、筒眼鏡つづめがねと呼ばれたこともあるこのような天体望遠鏡で、いずれも可視光線のみにより星空を観測しています。月を見れば詳細なクレーターの様子なども見て取れるのですが、何分にも月なにぶん明かりはあまりに明るく、星の観察に差し支えますから。では次はこちらを」

ぽん、と軽く叩く筒体が、

「ご覧ください。」

千年杉もかくや、という程の太さだ。辛うじて天体望遠鏡とは判る。長さは普通の望遠鏡と大して変わらない。

「隣の通常サイズの天体望遠鏡と同じ星域を観察するように設定してあります。どうぞ比べてみて

ください。」

「こちらは星が2つほど見えますが、特に変わったことはないように思えますが……」

「わあー！」

細い鏡筒を覗き込むヴィクトールの横で、巨大な鏡筒を覗いたメルがすぐさま歓声を上げた。

「星がいっぱい！　って、渦巻き？　これ、星じゃなくてぜんぶ銀河？」

「その通りですよ。手前の2つは近隣の星ですが、その他の、我々から遠く離れた領域、50億光年、あるいは100億光年を超える遙か遠く、通常の解像度の望遠鏡では見て取れない深淵の宇宙には、ご覧のように数え切れない程の銀河が存在しています。深宇宙^{ディープスペース}、と呼ばれます。」

ただ単に太らせただけのような見た目のこっちの望遠鏡は、遙かなる空間と時間を越えて届くあまりに微かすぎる光を極限まで集めるために、そして普通のレンズでは必ず発生する収差の影響を取り除くために、フィルタで分光し液晶に似た機構でレンズ内部の屈折率をリアルタイム制御し、ついでに地上の大気の状態と結像とを測定して揺らぎ^{ジューイング}を補償し、ゼフェル曰く馬鹿げた先端技術を詰め込んでその美しい像を結んでいる。

「100億光年離れた場所から光が届いたということは、これらの光が100億年の時間をかけてここまで届いたということ。つまり、その姿は今から100億年前の姿ということになります。」

「100億年前かー。ぜんっぜん想像つかねーなー！」

「とても若い頃の宇宙の姿、と思っただけだいたい合ってます」

呑気に感想を言ったユーイに、エルンストが苦笑しながら応えた。

「近隣の宇宙では、これほど密集し、また活発に活動するこれらのような銀河の数々は見出されま

せん。宇宙の黎明期に多くの銀河が生まれ、互いに干渉し合い、そして時間を掛けて現在のよう
に安定した宇宙を形成したことを、深宇宙の像は教えてくれるのです。」

思いを馳せるように天頂を見上げ掛けたエルンストの背後から、どかつ、と別の人影が突撃した。

「さささ、次いこーヨ、次！ 私たちのご自慢の観測機器はまだまだあるんだからサ！」

いつでも突き抜けて陽気な新宇宙の補佐官殿。エルンストは虚を突かれてから、気を取り直し、
ずり落ちた眼鏡を片手の指で元に戻した。

「さて、これまで見ていただいたものは全て可視光線、すなわち私たちの目が感じ取れるのと同じ
範囲の波長の電磁波による観測でした。しかし宇宙が発するシグナルはそれだけではありません。
人々が技術を得てゆくと、単に目に見えるものだけに留まらない、それ以外の手段で宇宙を捉える
ことが可能になってきます。」

こちらをどうぞ、とエルンストに勧められ、巨大なパラボラに付属する観察窓をティム力が覗き
込んだ。

「…空全体が、淡いグラデーションでほんのり光っているように見えますね。ひょっとして、宇宙
背景放射ですか？」

「さすが、よくご存知で。」

「ああ、知ってるよ！ メートル、じゃなくて、ええと、キロ、じゃない、なんだっけ」

「マイクロ波」

「そうそう、それそれ！」

セイランから幾分か冷ややかな突つ込みが入っても、ランディは一向に意に介する様子もない。

「仰る通り、これはマイクロ波による天体観測機器です。マイクロ波、すなわち可視光線や赤外線よりも長い波長の電磁波は、宇宙のすべての方向から、微かに、ほとんど等方向的に、しかしながら僅かな不均一性を伴って観測されます。それは宇宙がかつてとても小さく、遥かに熱く、そして時間をかけて途方もなく拡大したことを、また微かな揺らぎは、宇宙が希薄なガスからやがて無数の恒星を形成していったことを示しているのです。」

宇宙背景放射は、宇宙が原初の光の騒乱の時代を終え、初めて晴れ上がった時の姿の名残を今に留める、セピア色の写真のようなものだ。

「では逆に、可視光線よりも短い波長による観測では、宇宙はどう見えるか。それを、こちらのX線観測機器でご覧ください。」

「あれ、これ、ブラックホール？　なんだか、似たのを前に見たような……真ん中に真っ黒い丸と、周りは虹色の円盤みたいなの。前の円盤は白くて、もっと小さかったような」

「見せて見せて。……うん、これはキレイだねエ。」

マルセルと入れ替わったオリヴィエの声が弾む。

「先程のマイクロ波ですが、本来、我々の網膜では認識することの出来ない波長の光、この場合はX線ですが、それらの長波長や短波長を赤や青などの疑似色に置き換えて表示しています。疑似色、とは言いますが、我々の目がX線を見ることが出来ればそういう風に見えるであろう光景、という事です。」

俺も覗き込んだ。中央の深黒の球を取り巻く、色彩に満ち溢れた円盤。

「ブラックホールの周囲を巡りながら物質が落ち込んでゆく流れ、すなわち降着円盤は、その過程で物質の粘性と位置エネルギーの解放とにより、可視光線や、それよりもエネルギーの高いX線を放出し続けています。：周囲の物質を、その虚無の中に全て飲みこんでしまうまで。」

エルンストの説明の続く中、俺に代わったリュミエールが、ブラックホールの、物質と時空のその美しい終焉をじっと観察している。

「陛下方と補佐官方も、どうぞ。」

そう言つて次に代わつた。

「X線よりさらに一層エネルギーの強い、つまり波長の短い電磁波であるガンマ線による観測も、大変興味深いものです。こちらをどうぞ。今は宙天の比較的広い範囲を映しています。」

夜空に向けられた巨大な観測機器の末端の、傘のような凹面ガラスに観察範囲が映し出されるようになっていて、皆と一緒にそのスクリーンを見る。

「あ、光つた！」

誰かが声を上げた。迸るように強い閃光を発した一点。何十秒かの持続の後に残光を瞬かせて消えていった。間を置いて、また一点。

「そちらの重力波検出器と、そちらのニュートリノ検出器も合わせて見てみてください。」

こっちに表示される「現象」の発生頻度はガンマ線で見えるものよりも回数が多かったが、そのうちの幾つかはガンマ線観測機器のそれと一致するタイミングで起こっていた。

「これ、何が起こつてるの？」

「ガンマ線バースト」

ぽつりとゼフェルが呟いた。エルンストが説明を続けず、皆の視線がゼフェルに集中したから、それに気付いたゼフェルが渋々といった感じで解説する。

「さつき見たろ。ブラックホール。でかい恒星から超新星爆発でブラックホールが形成される時に、ものによっちゃ恒星の南北の極方向のすげえ狭い範囲にエネルギーが集中して、ビームみたいにガンマ線の放射が出んの。だからガンマ線バースト。」

「いよッ、物知りイー☆」

レイチエルの合いの手を、聴こえていない振りでゼフェルが言葉が続ける。

「要するに超新星爆発が起こってんだけど、さつきの幾つかのも、近くなら肉眼でもその光が見えんだけど、可視光線じゃ見えてねえだろ。すげえ遠いの。それこそ数十億光年とかのめっちゃめっちゃ遠い所で発生してんのに、ガンマ線だけまだ相当なエネルギーで検出されてんだよ。つまり、すげえ狭い範囲に馬鹿でかいエネルギーが集中してってこと。有生命惑星の近隣で発生したガンマ線バーストの所為で、惑星の生命体が絶滅、ってこともあるらしいぜ。」

「素晴らしい解説です。…後の心配はありませんね。」

「…何の後だよ」

リュミエールの小さな声に、ゼフェルが眉を顰めて答え、リュミエールは無言の微笑だけを奴に返した。

「では、機器の紹介はこれで最後になります。こちらが、王立研究院でつい最近ようやく開発が叶いました、ごく珍しい放射を捉える観測機器です。」

「ほう」「ついに」など、今まで殆ど口を開かなかった神鳥の光の守護聖と闇の守護聖などは感慨深げに感想を述べているが、

「ああ、うん、えーと、王立研究院の、つい最近の、ごく珍しい、うん？」

「言うな、ランディ。言いたいことは判るから。」

わざわざ用意されたテーブルの上に設置されたそれは、どう見ても見た目、ラジオ、だった。長いアンテナを伸ばし、電波信号を音声に変換する、古典的な受信機器。持ち手も付いていて携帯は可能そうだが、やや大型のどっしりしたサイズな辺りが余計にレトロ口を感じさせる。

普通のラジオと違うところと言えば、スピーカーが嵌るはずの場所にスクリーンが付いている点だった。

「アンテナの角度を調整して、いろいろな方向の夜空を観測してみてください」

「ちよつと、メル、アンテナ振り回さないで！ 画面で酔っちゃうつてば」

様々な方向へゆっくりアンテナを動かすと、スクリーンの映像が移動する。ところどころで、ごくぼんやりとした淡い光が映っていた。

「……なんか、つままない？ これ、何？」

「あ、これ、すぐく明るいですよ」

スクリーン上の小さな一点、夜空に針を刺したように鋭く輝く光があった。脈打つように光っていて、一度目にするととても印象的であり、目を離しがたくなるような、そんな光だった。

皆が注目する中、その光は脈動を続けながらだんだんと強くなっていく。内側から放射する光。

細い細い一点が、白熱して目を焼く。

「わ……あ！」

その音さえ聴こえてきそうな一閃を発し、光は激しい放射を撒き散らした。直視できずに皆が目を細め、——そして光は消えた。

「……何だったの？ 今の」

「ホーキング放射です」

「ほーき……」

マルセルがきよろきよろと辺りを見回し、ルヴァの姿を見つけて物言いたげにした。気付いたルヴァが柔らかに笑って答える。

「ああ、安心してください。そういえばまだ、ホーキング放射について話したことはありませんでしたからねえ。ちなみにあれ、何が発した放射だったと思いますか？ マルセル」

「よくわかんなかったです。太陽の光のような、超新星爆発みたいな、でもどっちとも違って、最後はほんとに綺麗に消えちゃったみたいだし」

「ホーキング放射は、ブラックホールからの放射です」

「ブラックホール……の、周りの、えっと、降着円盤の？」

「違います。ブラックホールそのものからの、放射です。」

星空の瞬く下、臨時の講義の場は、しばらく沈黙した。

「あの、ルヴァ様。俺、ブラックホールっていうのは、光でも何でも全てその中に吸い込んで、絶対に逃げられないし、何も外に出さないものだと思ってたんですけど」

「正解です、ランディ。あなたは正しい。ブラックホールは何者をも、宇宙の最速の存在である光

をも外に出さない、だからブラックホールと呼ばれてきました。唯一の例外が、ホーキング放射です。」

これはなかなか難しいことではねえ、と、少しも難しくなさそうなんびりした口調でルヴァが続ける。

「以前に何度か、お話ししたかと思っています。エネルギー保存則の成り立たない、微小な領域で、何もない状態から仮想粒子が生成されていること。ハイゼンベルクの不確定性原理。すべてが確率でしか語れない世界で、粒子が生まれ、消え、揺らいでいること。

一方、ブラックホールというのは、質量、即ちエネルギーがあまりに小さな一点に集中したために、その一点、特異点において、無限大の引力と、無限大の時空の歪みを持つようになった存在です。恒星や銀河にも匹敵するその総質量は中心の無限小の特異点に集中し、その莫大な質量のため、中心からのある距離以内に入ってしまうと、光でさえも引力に囚われ、外へ引き返すことが出来なくなります。この距離に相当するものがシュヴァルツシルト半径で、その境界を「イベント・ホライズン事象の地平線」と言います。さて」

ルヴァはそこで一息入れ、珍しく思案げにしばらく沈黙してから、続きを語った。

「では、事象の地平線近くに、仮想粒子が生じた時、何が起こるか。

仮想粒子は通常、互いが逆方向に移動する一对の粒子として生成されます。一方の粒子が事象の地平線の外へ行ったとすると、もう一方は事象の地平線の内側へ。境界の内側に入ってしまった粒子は、これはもう、地平線の外側へ二度と出ることは出来ず、ひたすら落ちてゆき、中心の特異点で無限の時空の歪みに飲み込まれるだけです。

しかしながら、特異点へ近付いてゆくその過程において、例えば地上のものが落ちてゆくに從つて位置エネルギーから運動エネルギーを得るのと同じように、ブラックホールへ飲み込まれてゆく仮想粒子も、ブラックホールの重力からエネルギーを得る。このエネルギーが、仮想粒子を生成するために一時的に「借りていた」マイナスのエネルギーを帳消しにし、対として生成された2つの仮想粒子を、本当の実在粒子に昇格させるのです。

事象の地平線の内側の粒子はブラックホールへ消えてゆきますが、事象の地平線から外側へ発した粒子は、内側の粒子と対であつたがために実在粒子となり、からくもブラックホールの境界から脱出する。これが、ホーキング放射です。」

わかりますかねえ、難しいですよねえ、ゆっくり考えてみてください。そう言つてから、少し間を開け、ルヴァは再び話し始めた。

「仮想粒子がブラックホールの重力から得るエネルギーは、実はこれは、ブラックホールの中心、特異点に近い方が大きなエネルギーを得やすいのです。かと言つて、最初から対の仮想粒子が事象の地平線の内側においては、どちらもその外側へ脱出することは出来ない。中心に近く、かつ事象の地平線の近くの粒子が脱出しやすい、これはどういうことかという、半径の小さい、すなわち質量も小さいブラックホールの方が、ホーキング放射が多いということなのです。

小さいブラックホールが放射を發し、エネルギーを失つてより小さなブラックホールとなり、なお大きな放射を發するようになる。これが加速度的に進行し、最後には爆発的な放射とともにブラックホールが蒸発する。これが、さきほど見ていただいた閃光の正体です。」

誰からともなく、皆がさっきのスクリーンに目を遣る。淡い光は、つまりは大きなブラックホー

ルで、鋭い光は小さなブラックホールという訳だった。

「蒸発、と言いましたが、このホーキング放射は、熱い物体が周りに熱を放射するのと、実は全く同じものとみなすことが出来ます。大きいブラックホールは放射が少なく、冷たい。小さいブラックホールは放射が多く、熱い。質量、あるいはシュヴァルツシルト半径によって、ブラックホールの特徴を言い表せるのと同様に、ホーキング温度によってもブラックホールを特徴づけることが出来、だからこそ、定例の御前会議ではいつも、ブラックホールの報告の際にホーキング温度を付しているのですよ。」

恒星アルゴールの総質量は¹⁵⁶単位恒星質量。

超新星爆発の際には質量のいくらかが吹き飛ぶのが普通だが、もし、その全てがブラックホールになれば、シュヴァルツシルト半径は⁴⁶¹km、ホーキングの絶対温度は0.000000000395度となる。

恐ろしく大きな質量と地平線を持ちながら、時間も空間も凍りつく、限りなく絶対零度に近い、特異点のその極限。

ルヴァの話の終わりを継いで、エルンストが会の最後を告げた。

「さて、我々からの天体観測の案内は、これで終了になります。最後までご清聴いただき、ありがとうございました。この後は、皆様、どうぞご自由にこれで、すべての星空を思うままに探索してみてください。」

エルンストの尽力に対して軽い拍手が上がり、守護聖たちと白い翼の少女たちは思い思いに様々

な機器の方へ散らばっていった。

その中に混じり、楽しげに皆と観測を続けるリュミエールの姿を視界の隅で確認しつつ、俺もそれから、色んな観測機器を再び覗き込んだ。可視光線、X線、重力波、ホーキング放射。

そうして探した。

星空の隅々まで。

次元を渉る暗闇の中、暖かく優しい気配に包まれた、紗のような眩い道を、ゆつくりと、辿る。
あの時と同じように。

あの時と違うのは、女王陛下に守られた背後の聖なる地に、炎の守護聖の気配が無いこと。

白い翼の女王陛下は、ひとりの少女として、いま、ただ願っている。

宇宙の平穏を。そしてオスカーの無事を。

不確定性原理をも動かすその願いが、尊い護りとなって、道を、私を包む。

次元回廊の終点、漆黒となった只中で、再び、私の視界一面をあの蒼い光が覆った。

人食い鬼の高温の光。

あの人の瞳と同じ色の、蒼く燃え盛る恒星の炎。

この間よりも、ずっと近くに。まるで私を、その炎の中へ飲み込もうとするかのように。

距離は相当に至近で、この身に白い翼の限り無き加護がありながら、なお灼け付いてしまいそうな程の幻惑じみた熱さに襲われる。

極高温の、蒼く巨大な星。

右手から背後、視線の先を辿った。

到底見えない程に遠い、しかしその先には確実にあった。試験運転を終え、すべての準備が整い、憐れな獲物を待ち伏せてじっと身を潜めているが如き、あの粒子加速器が。

実運用の稼働に向けて研究者、技術者のシャトルがその宙域にいくらか在るはずだったが、あまりに遠くこちらの様子に気付かれる気配はない。

アルゴール星系の、粒子加速器の近傍に降り立った先日よりも相当に恒星に近い、加速器よりも遙かに内側の軌道上、私の姿はあった。

私と女王のサクリアが恒星アルゴールに確実に作用を及ぼせるよう、粒子加速器の軌道を効率よく乱せるよう、エネルギーの放射の方向と連星惑星の軌道が厳密に一致するよう、そして可能な限り私の身を守るべく、王立研究院が幾度か計算を重ねて算出した位置とタイミング。もつと確実に事を成せる、恒星のもつと近くに、と私は主張してエルンスト達を困らせたけれども。

正面には恒星アルゴール。

寿命の短い大質量星といえども、あと数百万年は燃え続けるはずだったその星は、この事態に際して、もうじきその終焉を迎える。

右手、左手、背後の遠くには粒子加速器。

星を抱くように軽く両手を広げ、そうして私は、天頂を見上げた。

真つ直ぐ上。漆黒の空間の、その遙か先。

そこに在るのは、あの雪の日の曙に見上げた銀河ではなく、かの連星惑星と、その惑星上の、貴方。

広げた両手をゆつくりと、天へ差し伸べ、目を閉じて呼び掛けた。

(オスカー)

いるのでしょうか。そこに。

判っている、と、すぐに応える気配が私へ届き、たったそれだけで言い様もないほど激しく胸が締め付けられた。涙の滲む顔に笑顔が浮かぶ。

オスカー。

貴方との隔たりがこれから先もどれほどあろうと、ただ無事に、ただ皆と笑っている貴方がいれば、もう、それだけでよかった。

宇宙と貴方を護れるのなら、ただ、それだけでよかった。

どうか貴方からも、力添えを。私が十全に事を進められるよう。宇宙を護り通せるよう。

そう願った瞬間、遥か遠くの背後の異様なざわめきに全身が総毛立った。

7 崩壊する真空

絶望は、いとも簡単に、ごくカジュアルに、何て事のない顔をして、万人の下を訪れる。

粒子加速器が暴走を始めた、それを試みた者は、そもそも恒星アルゴール星系内への粒子加速器の建設を最初に提案した人物だったらしい。

ただ末端の一研究者で、その建設案は最終的に所属部署の決定として吸い上げられ、実際の建設が始まってからも彼が特に注目された事は無かったようだ。彼自身にとってもその方が好都合だった。宇宙を崩壊させるのだという、固い決意に根付いた密やかな計画を進めるためには。

その惑星の沸き立つような激しい地殻活動の、突発的な噴火と火砕流で婚約者を亡くしたのだという。彼女も研究者だった。

最終的に宇宙を巻き込む事になったその絶望を、責める気にはなれない。

彼が負った運命に比べれば比較しようのないほど軽い話でしかないが、私だって、猫の鳴き声たったひとつで、永遠に絶望したのだから。

「アイ・オープン」

すつきりとした瀟洒な造りのカウンターで、バーテンダーに注文を告げた。

「お前は何にする？ オリヴィエ」

「エル・ディアブロ。あんた最低。」

アルコール度数の低いロングドリンクだ。酔い潰れる気はまだなさそうだった。それにしても悪魔とは。

オーダーを受けたバーテンダーが滑らかな所作で動き始めたのを少し眺め、それから答えた。

「最低とは何だ、最低とは」

「今日みたいなあんな楽しい会やっておいて、リュミエールもすごく嬉しそうで、これで大丈夫かって私に安心させておいて、それでこんな場に呼び出すって、どうということよ」

「別に嫌なら何も言わなくていい」

「そういうところが最低っていうの。バカ。」

オリヴィエがカウンターに肘を付き、片手で額を抱え込んだ。場は沈黙し、バーテンダーがドリンクの用意を続けるグラスと金属の音だけが小さく鳴っている。

黄色いカクテルグラスと赤いロンググラスが無言で差し出された。

乾杯、と言える雰囲気でもないから黙って飲み始める。オリヴィエも一旦顔を上げてグラスに手を伸ばし、口をつけた。それからグラスを置き、悲痛な顔で堰を切ったように話し始める。

「何度も言ってきたでしょ。夢なんて気にするな。私だけじゃない、皆だって気付かない、知らないように、このまま続けばそれでいいように振る舞ってきたでしょ。それでいいじゃない。楽しかったわよ、今日なんて特に。あんたのお陰で。だからすごく感謝してたのに。どうしてそのまま知らない振りしてくれないのよ」

「頑張ったな。ずいぶん長いこと。辛かったろう。ありがとう。」

そう礼を言ったら、オリヴィエは一瞬きょんとし、そうして顔を再度歪めて赤くして、とうとうその濃青の瞳から堪えきれずに涙を零した。

自分を落ち着かせるように夢の守護聖が赤い飲み物を呷って一息で飲み干すのに合わせ、俺もグラスを空ける。

オリヴィエがグラスを置いて綺麗にネイルの入った指先で目元を押さえ、しばらく沈黙してから、話した。

「……辛くなんてなかった。私はこのままで良かった。リュミエールを護るためなら、何だって、いくらだってしたわよ」

声のトーンが一段上がる。

「私らがこうやってうだうだして、それであの子の命が永らえるなら、いつまでだって、何だっただったわよ……!!」

子供のようにぼろぼろ泣き始めたオリヴィエの頭を軽く引き寄せ、緩いウェーブの金色の髪をゆっくり撫でた。

しばらく思うままに泣かせてから、静かに告げる。

「リュミエール自身が、それを望んでいない。……お前だって判っているんだろう？」

「……………」

オリヴィエはじつと黙ったまま、頷かなかった。判ってはいても、認めたくはないらしい。

すい、と、オリヴィエの正面に綺麗な琥珀色の液体が入ったカクテルグラスが差し出された。二人して顔を上げる。

「アフィニティです。どうぞ。」

3種類の異なる酒をステアしたカクテル。契約にも似た親密感、アフィニティ。

強い酒だから、酔え、ということかもしれない。

オリヴィエはバーテンダーの顔をじつと見つめ、そしてグラスに手を出した。

「貴方にはこちらを。キス・オブ・ファイア」

俺に差し出されたカクテルはやや赤みがかっている。スノースタイルの、苦くも甘くもあるカクテル。

二人で、作ってもらった酒をしばらくただ飲んだ。空になる頃合いに再び話し始める。

「一応、告白はしたんだがな。断られた。」

「ちよつと、聞いてないわよ、そんな事」

「今、話したからな。」

玉砕やめてよ伊達男ー、と、泣いて飲んで力の抜けてきたオリヴィエが力の抜けた口調で呟く。

自棄じみてグラスを呷って空にして、やがてぼつりとオリヴィエが呟いた。

「……判ってる。あんたの言葉に、どれだけ迷っても悩んでも、結局、「ここ」でそれを受けるような子じゃないってことは。判ってる。」

「俺が「俺」かどうかは疑わしいが、それにしても向こうの「俺」がとつと云っておけば良かったんだ、と思いはする。」

「ほんとそれ。やっぱ最低だわ、あんた。」

「ホワイト・リリー」

バーテンダーにオーダーする。ほとんど無色透明なのに強いアルコール度数の、強情なあいつのような酒。

「マグノリア・ブロッサム」

オリヴィエが続けて注文した。白くほんのりと薄紅の、優しく爽やかな飲み口の、これもまた、あいつらしい。

「それで、どこまで知ってるのよ。あんたは。」

カクテルが出されてから、もはや躊躇なしにオリヴィエが尋ねてくる。

「俺はあいつ、だろうが、実はまだ、夢が終わっていない。判らないことがまだある。「ここ」がどこか、だ。」

あの夢の後、あいつに、「俺」に、何が起こったのか、まだそれを知らない。

「ずっと星空を探したもんね。さつき。見てた。」

あの後、様々な観測機器ですべての星空を探した。

「あった？」

「無かった。どこにも。恒星だけでなく、ブラックホールでも。」

アルゴールが。

あれほど大きな星が、たとえどんな形態であつたとしても、全天のどこにも見つからなかった。

「どうということだ？」

「どういうもこういうもないでしょ。あんたにしちゃ察しの悪いこと。恒星としての光もない、ブラックホールとしても見当たらない、蒸発して消えるには大きすぎる、「ここ」からどこを探しても見つからないんなら、「ここ」に対する答はひとつに決まってるじゃない。」

言葉を無くした。

そして悟った。

「…………ああ。そういうことか。」

辛うじてその言葉だけが、口をついて出た。

そうしてオリヴィエの、その絶望の程を改めて辿る。

判るでしょ、と言いたげな、再び俯いて涙を落とす、その横顔を眺めた。

一人でずいぶんと苦勞させて。

今、俺がこいつに出来ることはひとつだけだった。

「心配するな。俺の責任だからな。必ず、俺が救ける。」

たとえその言葉に、何らの根拠がなくても。

きつと俺は、そして「俺」は、これまでもそうやって道を切り開いてきた。

オリヴィエは泣き顔を上げて、俺を見て、そして笑った。

「そういうバカ、嫌いじゃないよ。」

それからバーテンダーの方を向き、語り掛ける。

「あんたもこいつのこういう所、好きだったでしょ？ リュミエール。」

バーテンダー——リュミエールは、ただ黙って微笑んだ。

グラスがまた空いて、

「ね、なんか見繕って作ってよ。リュミエール。」

オリヴィエはリュミエールにそう頼んでいる。

「では」

また静かに用意を始めて、しばらくしてから出されたのはショートカクテル。濃い赤色の。

「これ、何？」

ラ・ヴィ・アン・ローズ

「薔薇色の人生です。」

オリヴィエは顔を上げ、リュミエールのその微笑を見た。

「……よい人生でした。」

オリヴィエはリュミエールをしばらく見つめて、目を閉じ、両目から一粒ずつまた涙を零した。それから目を開けて、涙の残る顔でリュミエールに語り掛ける。

「ね、あなたの分も作って。一緒に乾杯したい気分。」

「じゃ、俺の分も作ってくれ。」

目を丸くしたリュミエールは、間を置いてからくすくすと笑った。俺とオリヴィエを何度も幸せにしてきた、その優しい笑い声。

そうしてから手早く、2人分の同じカクテルを用意する。

3人揃った所で、それぞれがグラスを掲げた。

「乾杯」

ちりん、と綺麗なグラスの音が響いた。

「リュミエール!!」

誰の叫び声だったのか。次元回廊を通して届く声。

状況は知らされずとも判った。粒子加速器が予定に無かったはずの稼働を始め、時計回りと反時計回りに走る一対の粒子を制御不能の状態でどんどんと加速させている。光速に近づくにつれエネルギーを蓄積し、ほんのちつぽけだった粒子が相対論的效果で恐ろしいまでに質量を増していく様子が、遥か遠くのここからでもはつきりと感じ取れた。そのエネルギーは、聖地側で試算していた想定値の上限を、それですら真空崩壊の危険性が相応に高いと予想されていた値を遥かに超えている。

もはや今この時ですら、粒子の衝突が起これば真空の崩壊は必然であり、拡がってゆく真の真空の泡に飲み込まれ、この宇宙は――。

自分の位置、彼の在る連星惑星の現在地点、アルゴールの質量と地軸方向、粒子加速器までの軌道距離。一通りをざっと脳内で洗い出し、今なら間に合うと判断した。迷っている暇は無い。

異常事態を察した研究者達のシャトルが粒子加速器から離れ、遠方に向かって急いで退避を始めたらしいことだけが、唯一やりやすくなった点だった。

「始めます!」

次元回廊の先の聖地から微かに危険を告げる声が聞こえるが、今、看過すればもはや宇宙の命運はない。

両手を蒼い恒星アルゴールに向けて大きく翳し、力の限りにサクリアを放出して、それから目を閉じて集中した。その代理たる私に繋がる、女王陛下のサクリアの力をも借りて。

恒星アルゴールの中心の無限小の一点に、無限大の重力——特異点を作り出すべく。

すぐにアルゴールの中で小さく小さく生まれたそれは、恒星自身の莫大な重力と圧力に四方八方から押し潰され、あつという間に周囲の質量をその中へ吸い込み始めた。中心で破壊される時間と空間、拡大してゆく地平線。

それはもはや紛れもない、ブラックホールの姿だった。何もかもを、その特異点の中に飲み込む。しかしアルゴールはあまりに大きく、恒星の中で拡大を続けるブラックホールの周囲を大量のガスの層が未だ厚く厚く覆っている。

（早く。もっと早く……！）

時間と空間とをも動かす、女王陛下の不確定性原理、ブラックホールの形成をこの身のサクリアで支えながら、一瞬でも早いその拡大を自分の内に繋がる力に願う。特異点に雪崩れ込んでゆく質量。恒星の自転はブラックホールの自転となり、恒星内の赤道面に回転する降着円盤を形成し始め、形成しては事象の地平線の内側へ雪崩れ込み、質量の加速と破壊とが急激に恒星を加熱させ、ブラックホールの質量と事象の地平線とが大きくなってゆく。

目の前の蒼く燃えていたアルゴールが、内部からの更なる熱によって眩く膨張する様が視えた。恒星の外部には宇宙空間に残っていた彗星や小惑星、僅かな星間ガスが赤道面上に集中し始め、

既に降着円盤を形成しつつあり、幾つもの欠片が私の周囲を通り過ぎてアルゴールの内へと向かっていった。

遠方の軌道上の粒子加速器の長い長いその中空のループが、重力分布の急激な変化と放射熱とに晒されて、軋む音を立てたような気がした。そしてその中を未だひた走り、エネルギーを蓄積してゆく粒子。

『リュミエール！』

声が聞こえた。聖地からではない、私の、天頂方向の遙か遠方から。

(オスカー……)

彼の緋色の姿を脳裏に想い描いた、その時だった。

背後を振り返る、自分のその動作がスローモーションのように感じられる。

見えるはずもない彼方の粒子加速器の、さらにその中で近付いてゆく2つの大質量の粒子の様子が手に取るように見て取れた。あまりに集中して力を使い過ぎ、私の周囲の時間と空間とが歪んでいる。

互いがほぼ光速で近付いているはずなのに、それもまたやけにゆっくりと感じられる2つの大質量の粒子の、その距離が少しずつ、少しずつ縮んでゆき、

本来ならば激しく衝突し、莫大なエネルギーから生じる億千の粒子の軌跡が銀河のようにこの宇宙の空間中に描かれるはずだった。

だがその2つの粒子は、出会い、そして運命のように対合し、崩壊し、この世界から綺麗に消え去って、

……異質なものを生み出した。

その空隙を、その色を、どう表現していいか判らない。

それはこの世に、あつてはならないものだった。

真の真空。

目を覚ましたかのようなその空虚が、この世界を破壊し尽くすべく、光の速さで拡大を始めたのが判った。

この時にあつて、今、私は貴方と会話をしている。

声にならない貴方の声が聞こえ、声にならない私の声が答える。そして貴方が、沈黙する。

貴方なら判るでしょう？

だって真の真空が広がる速さは、たかだか光の速さでしかない。

時間を、空間を超えることのできる女王陛下の御力なら、そしてその代理たる守護聖なら、真の真空が宇宙へ拡散してしまうその前に、ブラックホール・アルゴールの中へ——光すらも逃れることの出来ないその事象の地平線の中へ、真の真空を捉えることが出来るはず。

私の全力はブラックホールの拡大に注いでいる。他の守護聖は時空を隔てた遥か聖地に。助力を乞えるのは、今、惑星上のそこにいる、貴方しかない。

守護聖のサクリアが尽きることなく湧き出る、それが何であれ作用をもたらすエネルギーを有するものなのだから、そしてエネルギーとは質量と同等であるのだから、きっと守護聖には物凄い重力が作用していますね、と私が言い、

貴方が、俺たちの周囲に重力レンズ効果が見えるかもな、と言い、
オリヴィエが、プロポーションの歪みを気にしてか、それとも重力 $\parallel$ 体重と考えてか、やめてよ
そんな怖い話ー、と言い、

貴方が笑った、

昔、そんな事もありましたね。

貴方と私とが共にいて、ささやかに平穏だったそんな時は数えるほどしか無かつたけれど。

天頂を見上げ、沈黙を続ける貴方へ、力の限りに呼び掛けた。

「オスカー………!!!」

判ってくれるでしょう？

貴方なら。

猫の鳴き声が聴こえて、彼の気配が動いた。

『必ず、俺が救ける………!!!』

その言葉を最後に、溢れるほどの貴方の力が私に届き、注がれた。

……ありがとうございます。

貴方が力を尽くし、宇宙の命運を掛けて注ぐ信頼が、私の上にあつたことも。

たとえ貴方のその言葉が、絶対に叶わない言葉だと知っていても。
ただ、その信頼が、その言葉が、何よりも嬉しい。

そうして私は、エネルギーそのもの、重力そのものとなって、真の真空を引き寄せ、人食い鬼の
蒼い光へ引き寄せられる。

「リュミエール!!」

「アンジェリーク！ 危ない！」

時空の激しい歪みに途切れた次元回廊の向こうで、白い翼の少女が手を伸ばしてくれたのも、それを引き止めてくれた人々がいてくれた事も嬉しかった。

在るべき所で為すべき事を為してくれる、かけがえのない仲間たち。

粒子加速器が至る所で壊れてゆき、他の破片や小惑星と共に、そして私とともに、アルゴールの

膨張する光へ、その中のブラックホールへ堕ちていく。

拡大しつつある真の真空は、その形を歪めながら、空間ごと私とブラックホールの重力へ引きずられ——事象の地平線の中へ消えていった。

ブラックホールの急激な形成と降着円盤の激しい運動によってもたらされた莫大なエネルギーは、蒼い恒星の地軸の先、南北の2つの極方向へ集中して、恒星の最後のひと殻を突き破り、ガンマ線バーストとなって宇宙の彼方へ走り出た。

北極方向、天頂の、その先には連星惑星。

ガンマ線バーストは、潮汐力で互いを煮え立たせてきたその2つの惑星の、生命を擁さぬ一方へと直撃した。光の筋の中に惑星は丸ごと飲み込まれ、一瞬にして粉々に砕け散り、見る間にその大半が蒸発し、残った僅かな破片はバーストと共に、遥か光年の先へ飛び去っていった。

何十秒かのバーストの持続の後、光は消え去り、辺りに宇宙の穏やかな沈黙が戻って、残ったもう一方の惑星は、今は静かに、自転と公転の宇宙空間の旅を続けていた。

その惑星上に在る、彼の存在と共に。

時間と空間を越えて、そこまでを視た後、ようやく我が身を振り返った。

アルゴールの蒼い光はもはや消え、宙域に数多あった破片も小惑星も尽く飲み尽くされ、巨大な質量の大半がそれと化したブラックホール・アルゴールと、僅かな降着円盤が残されていた。

既に特異点の中へ消えた物々に幾分か遅れて、後はただ、どこまでも堕ちていくだけの私がある。

ブラックホールの存在はその中心の特異点ただ一点のみの存在で、事象の地平線なんてものは実際には何も無い空間であり、ただ引き返せるかそうでないかの概念上の領域でしかないのだけれど、不思議とその時、そこがそれだと判った。

私の情報が二度と外部へ戻れなくなるその境界を超える直前、最後に何かを伝えるべきか、少し考えた。

こうなった事に後悔はない。宇宙を救えて、貴方達と共に在れて、幸せだった。

…ああ、だけど。

だけどひとつだけ、もしひとつだけ、遣り直せるのならば。

……猫のなき声が聴こえた時に、あんな事を言わなければ良かったと。

そうして私は、事象の地平線を越え、全ての時間と空間が終わる特異点へ消えていった。

「もう、これで何度目の講義になりますかねえ……」

着席している二人の受講者を前に、ルヴァが遠くなった昔を懐かしむようにそう言った。

「今日で、私の講義は最後になりますでしょうか。宇宙の終わりについてです。」

宇宙に終わりは、あるのでしょうか。あるとしたら、どんな風に終わるのでしょうか。

そしてその時、思考を持つ我々は、いつまで、どのように承らえるのでしょうか。あるいは、潰えるのでしょうか。」

黙って聴いている、その二人の背中を、俺は少し離れた遠くから眺めている。

ルヴァは沈黙し、何をどう語るべきかしばらく思案した様子で、そうしてから例ののんびりした口調で話し始めた。

「思考、とは、原理的に、何かしらの入力に対する処理と出力です。そしてまた、出力は別の系統への入力となり、処理と出力がなされる。これが思考の連続性です。」

一度間を置いて、それから話を続ける。

「一方、宇宙の命運はというと、昔は2通り——いや、3通りというべきでしょうか。考えられていました。」

ご存知のように、現在、宇宙は広がり続けている。これは原初、宇宙が爆発的な拡大からその歴史を開始したことによります。この先に想定される命運は2通りです。宇宙がそれ自身の重力に引き戻され、拡大を止め、縮小に転じて、最後は極小の領域で特異点を形成し、その生涯を終えるこ

と。もうひとつには、重力から逃れて永遠に拡大を続け、どこまでも発散して、宇宙の歴史はその全ての星が燃え尽き、すべてのブラックホールが蒸発し、すべての粒子が対消滅するまで、そしてそれから先も永遠に空虚な状態で永らえること。

この2つはどちらかが正解で、研究が進んだ現在では前者の縮小説の可能性が否定されつつあり、宇宙はどこまでも拡大していくと考えられています。

これらとは別に、例えば真空崩壊などの激しい現象によって、突然に宇宙の歴史が遮断されるところ。これもまた、想定される宇宙の命運のうちのひとつです。

そうならないように、私たち守護聖が、宇宙を護るべく尽力しているわけですが。」

とうの昔によくご存じですかねえ、こんな事は、と、ルヴァが少し恥じるように笑った。

「さて、そのような宇宙の命運の中で、我々の思考は、いつまで続くのでしょうか。」

思考とは入力に対する処理と出力。であれば、当然のようにその作業を行うためのエネルギーが必要になります。では、無限の思考を保つためには、無限のエネルギーが必要になる、と、そう思えそうですが、実はこれは正確なところではありません。

思考とは、主観的な経験です。ひとつの思考の処理作業は、その主体にとってひとつの時間単位と認識される。もし宇宙がどこまでも拡大していくのなら、枯渇していくエネルギーに合わせ思考の間隔を長くし、もし宇宙が狭まってゆくのなら、収縮により溢れてゆくエネルギーに合わせ思考の間隔を短くすれば、原理的には有限のエネルギーで無限の思考を続けることが可能になります。

ひとつの惑星の人類全ての思考を永遠に維持するために必要なエネルギーが、太陽の燃焼たった数時間分で事足りる、という試算も出ているほどです。」

そこまで言って、ルヴァは少し困ったように笑って、小さな子供に優しく言い聞かせるように、言葉を選びながら話を続ける。

「ええ、ですからね、その……ええ、このままでもいいと思うんです。収縮する世界では、有限の時間であつても、無限の思考が可能になる。であれば、いつもの平和な聖地ですつと、永遠に、過ごしているのと、何ら変わりはない。きっと皆さんですね、心配していると思うんです。あなたのことを。だからこのままでも」

「ありがとうございます。ルヴァ様。」

ひとつの背中が立ち上がった。

ルヴァに、そして軽く振り返って俺に、穏やかに微笑った。

リュミエール。

「もう、よいのです。ありがとうございます。駄目だと思ひながら、とても幸せで、ずいぶん承らえてしまった。

でも、もう、終わりにしなければなりません。

ここは私が作ってしまった、私でしかない世界なのですから。」

「リュミエール」

もうひとつの姿——オリヴィエが、立ち上がって水の守護聖に堪らず声を掛ける。ルヴァの姿は、いつの間にか消えていた。

「オリヴィエ、貴方にも。ずいぶんと助けられ、それから、辛い思いをさせてしまいました。」

こんな世界であつても、…こんな世界なのに、」

リュミエールは自嘲するように、少し唇を歪めた。

「私はオスカーと、二人で向き合う自信が無かったのだと思います。だから貴方をずいぶん頼つてしまつた。私の中の貴方に。」

「そんな事、言わないで。それが私の望みだつた。」

オリヴィエはぼろぼろと泣いている。リュミエールは黙つて、軽くオリヴィエを抱き締め、それからその腕を離した。

「ありがとうございます。」

オリヴィエはリュミエールを見詰め、その泣き顔で俺を見、

「頼むよ、オスカー。」

そして静かに歩み去つていった。

世界の残りはもう、ずいぶんと狭くなつている。

ごくほんのりとした灯りの下、二人だけになつて、リュミエールが、俺の方を振り返つた。

唇が何かを言おうとし、そのまま迷つて、それから微笑つた。

綺麗で、そして哀しい微笑みだつた。

「……ごめんなさい。オスカー。何よりも、貴方に。」

俺はゆっくり、口を開いた。

「この世界に気付いてから、考えていた。何故、こうなったのか。」

「……………」

「遣り直したかったんだな、お前は。最初の、シュレーディングアの猫から。」

リュミエールは再び微笑った。申し訳なさに、そして自嘲気味に。

「愚かな事でした。あの時、あんな事を言った事も。この時にあって、もう一度遣り直したいと、そうして今度は貴方のように強く在りたいと、そう望んでしまった事も。」

ああ、お前は俺になりたいと望んだのか。だからか。

リュミエールは上目がちにこちらを見て、諭すように俺に言った。

「本当の貴方ならば、言葉を尽くして私を責め立てるところですよ。そこは。」

それには答えず、俺は尋ねた。

「シュレーディングアの猫が生きているか死んでいるか、ルヴァに尋ねられた時、お前が何と答えたか、覚えているか？」

「覚えています、もちろん。何度も後悔しましたから。貴方は？」

「思い出した。今。」

リュミエールは黙って、断罪のような俺の言葉の続きを待っている。

「『猫は泣いています』、と。」

リュミエールは俺の言葉にくすくす笑って、そして眉根を歪めて、涙を落とした。

『猫は泣いています。きつと。可哀そうです。箱に閉じ込めて、生きるか死ぬかの目に遭わせるなんて。』

互いが守護聖に就任してからその最初のルヴァの講義の時まで、何事もなく普通の同僚として過ごしてきた俺たちが初めて大喧嘩をしたのは、そのリュミエールの言葉が切掛けだった。

「俺」が何を考えてのその喧嘩だったのか、詳しくは判らない。俺はこいつであって、「俺」ではないから。ただいかにも軟弱だと貶^{けな}して「俺」が嫌いそうな言葉ではある。

その徹底した判り合えなさに、リュミエールはただ絶望した。

そうしてリュミエールと「俺」との接触は、それ以来、断たれた。

「申し訳なくて。……貴方の対たるべき私の、その弱さを当たり前のように曝け出してしまい。呆

れられても当然ですよね。

あんな事を言わなければ良かったと、そうしていれば、私たちの関係も少しは変わっていたのかと。ずっと後悔していました。ずっと。そしてまた、」

リュミエールは目を閉じ、俯いて、涙を零す。

「弱い私は今になってこんな事を望み、「貴方」とは似つかない勝手な貴方を作り上げ、再び、貴方を貶める事になった。……すみません。」

「……」

擁護の言葉は見付からない。それをしたい想いは十二分にもあったが、もはやこの場に至ってそれを尽くしたところで、結局はどこまでも一人芝居でしか無かった。

それでも。

少しずつ消えてゆく世界の中。

「それでも、俺はお前が好きだった。

目が覚めても、ただそれだけは、否定しないでくれ。」

お前と共に在った、俺の存在を。

リュミエールは涙に濡れた目を見開き、再び溢れそうになる涙を堪え、そうして、微笑ってくれた。

きっと、俺のために。

それで良かった。

そうして、俺は目を閉じ。

ひとつ、深呼吸。

そしてもうひとつ。

ゆ
つ
く
り
と
目
を
開
く
。

そうして、目覚めた私は。

彼の瞳のような、煌めきの。

数多の星々に囲まれた虚空の、只中に在った。

8 そして再び、シュレーディングガーの猫

私の瞬きとともに零れた涙は、もはやどこへも落ちることが出来ずに、ただ、私の目の前で小さな球を作った。

ここは時間と空間の終わりの、重力の果て。

球の中には、そして私の周りには、四方八方から雨のように降り注ぐ星の輝き。

事象の地平線の内から外へは何物も、光でさえも逃れることは出来ないが、外から中へは全ての光が落ちてくる。

星の瞬きをその中に湛える透明な球は、しばらく私の周囲を漂ってから、ゆっくりと何処かへ消えていった。

「……………」

私は、顔の前に掌を掲げてみる。

無限小の領域にあって、すでにそこに実体はない、観念のみの存在。

実際には、事象の地平線を越えてからの一瞬と言える時間だったのだろう。

思考とは、主観的な経験。

永い永い夢。

この短い時間で、何もかもを諦めた振りをしながら、私に都合の良い彼を酷く捏造してまで、一人芝居でしかない夢をあれこれと数多の人に理由づけさせては延々と引き伸ばしてまで、そうまでして彼の事を知りたかったのかと、もううんざりするほど重ねた自嘲に更なる自嘲を重ねて涙が溢れた。

結局、何も判らなかつたではないか。本当の彼の事は、なにひとつ。

あの新年の儀の時に、私をそのアイスブルーの瞳で射竦めた彼が、何を考えていたのかも。何故彼が、あの雪の夜を、私と共にしたのかも。

『俺の責任』と語った彼の、『夢から覚めた』と言った彼の、その優しい微笑みの、その真意が何であつたのかも。

私には、本当に彼が解らなかつた。

至極当然だった。私は彼ではなかつたのだから。

シュレーディンガーの猫が生きているのか死んでいるのか、それすらも判らずに。

目を覚まし、これ以上もなく顕らかに星の光の下に晒されたのは、ただ私の愚かさと、貴方への恋心だけ。

そのどちらもが、私がこのままこの特異点で消え去ってしまうに充分な理由だった。

むしろこの上ない贅沢だとさえ思うべきだろう。

宇宙を救えて、そして次元回廊を開く障害を取り除けたことで、惑星上の彼をもおそらく私は救えたのだろうか。きつと。

このまま貴方と永遠に隔たれようとも、ただ無事に、ただ皆と笑っている貴方がいれば、もう、それだけでよかった。

そう考えて、私は安堵の笑みを浮かべて。

「……………」

なのに。

何故私は、こんなにも永く在り続けているのだろうか。

空間も時間も、何物をもその無限の重力で破壊し尽くす特異点には、とつくの昔に到達している。

いくら思考が主観的な経験だとはいえ、もう私にはこれ以上必要ないことなのだと思いますのに。

睫毛に残る涙を指元で軽く拭い、辺りを見渡す。

私を包む、一面に広がる星々の瞬きと、無限を思わせる果てしない静寂が広がる中、

——猫の鳴き声が聞こえて。

私はゆっくりと振り返った。

目を逸らすことも出来ずに。

私を真っ直ぐと見据え、ゆっくり近づいてくる、その、アイズブルーの瞳から。

……彼の顔には、如何なる表情も無い。

彼と向き合っている私は、ただ驚きに囚われて、ただ視線を合わせたまま、

「……オスカー？」

辛うじて、ただそれだけを尋ねた。

彼がここにいるはずは無い。本当の彼は、事象の地平線の外側の、安全な場所に在る。

だとすれば、未だ私は懲りもせずに、所詮は私自身でしかない夢を見続けているのだろうか。

私の疑問に応えるように、ふ、と、彼が笑った。

あの時と同じ、彼らしくない、優しい微笑みだった。

「考えている事はだいたい判るが、それは正確じゃないな。俺はお前でもあるが、お前ではない、とも言える。」

それは、どういう――

「夢が一人で見られるものだと、そう思っていたか？」

そう言うのと、私のほんの近くまで来ていた彼は歩みを止め、ゆびさきが近付いてきて、あの、長い指が――私の頬を撫ぜた。

笑みは既に無く、そのアイスブルーの瞳に、私は再び射竦められる。

「ハイゼンベルクの不確定性原理、だ。」

彼の親指が、私の唇の上を滑った。

「小さなエネルギー、小さな素粒子であれば、こうやって近くにいるだけで、粒子の持つ位置の不確定性により、リユミエール——お前を構成する粒子と俺を構成する粒子とが、入れ替わっている。

……ましてや俺達は、あの雪の夜、誰よりも——誰よりも近い距離に在っただろう？」
彼に見つめられて私の鼓動が大きく音を立てた。彼の指が触れる頬が、唇が熱い。

「お前を構成する粒子の幾らかは、今、かつて俺だった粒子で構成されている——その俺だ。だからお前であり、そしてお前ではない。

お前ではないから、お前の忘れていた事も教えてやれる。例えば、特異点の定義。」

「定義？」

「特異点とは時間と空間の終わりではない。正しくは、物理法則が適用できなくなる点、換言すれば、何が起るかを予測できない点、だ。だからこそ「特異」点だ。

何が起るかを定められないのであれば、我らが女王陛下が、その願いを途絶えさせるはずがない。お前を救いたい、という。」

この身に、未だ女王陛下の加護が——。

思わず、片手を胸に当てた。

実在を持たぬ観念でしかない存在で、未だ鼓動を刻む、私の身体。

「それと、もうひとつ。まだお前は、最後まで目を覚ましていない。」

…どういふことか、判らなかつた。

私の愚かさは充分に思い知つた。貴方への恋心も居た堪れないほどに曝け出された。これ以上、何を突き付けられるというのだろう。

「あの夜明け、夜を交わしたその最後、歩み去つてゆくお前を抱き締めた俺が、何と言つたか。覚えてゐるか？」

意外な言葉に少し戸惑つて、それから記憶を辿つた。

……それは。その時は。

あの凍えた雪の夜、別れの曙。私を背後から抱き締めた彼。

あの時、耳元で彼の唇が動いた気がした。でも何も聞こえなかつた。

蓋を開けさえしなければ。

シュレーディングターの猫が生きているか死んでいるかなど、誰にも解りはしないのだから。猫自身にさえも。

……今、私は何と？

「気付いたか？」

ぼとり、と、横から私の頬に水滴が当たった。

何処かへ消えた私の涙ではなく、加速度を持つて落ちてきたそれは、事象の地平線の外側からここまで落ちてきたもの。

私の前に立つ彼が、その地平線の先を向き、その唇が動いて、私に告げる。

「猫が泣いている。蓋を開けてやれ。

お前自身が、あいつ自身が永い間、開けようとしなかった蓋を。」

事象の地平線の内側へは、すべての光が、すべての情報が落ちてくる。

私は地平線の外側へ視線を遣り、そこで繰り広げられている光景を見た。

「リュミエール」

願いを捧げ続ける二双の白い翼と、その力に護られた次元回廊の終端の宇宙空間に集う、すべての守護聖。神鳥の宇宙の、聖獣の宇宙の。その皆がこちらへ、一心に力を尽くして。

「戻ってこい、リュミエール」

こちらへ両腕を広げて皆と同じように守護聖の力を使いながら、絶え間なく涙を流す、貴方の姿。夢にですら、一度も見たことのない。

溢れる涙はゆつくりと重力に引かれ、星の光とともにここへと降ってくる。

「……何をしているのですか。皆……」

事象の地平線の内から外へは何物も、光ですらも出ることは叶わない。

それはこれ以上なく自明の法則であるのに。それを皆、当然彼も、知っているはずなのに。

「サクリアの引き上げだ」

私の背後の彼が言い、私の思考は一瞬空虚になった。

その言葉の意味するところと、宇宙を律する物理法則とが私の脳裏を交互に巡る。

「……………まさか。そんな。」

地平線の外から目を離せないまま、思わず呟いていた。

ブラックホールの縮小と蒸発の加速に乗じて、私の情報をホーキング放射として地平線の外へ引き出そうと？

「——そんな。こんな巨大なブラックホールで、そんな無茶な、……」

信じられずに、背後を振り返ってそこにいる彼に確認する。彼は無表情を重ねたまま。

極小ブラックホールであれば十分に熱く、爆発的なまでのホーキング放射が見られもするが、アルゴールほどの大質量を持つブラックホールは極寒の、それこそ宇宙背景放射よりも遥かに低い温度しか持たない。それが十分な放射を発するに到るまでの時間は恐ろしく長く、宇宙が生じてからここに到るまでの何百億年の、そのまた何百億を掛け合わせたよりも長い時間を要する。

だからといってそれをサクリアの引き上げで早めようなど、無理にも程がある。守護聖の内から無限に沸き起こるサクリアの放出とは違い、対象から守護聖へのサクリアの引き上げは酷く不自然な行為で守護聖の身体的負荷が甚だしい。ましてや惑星よりも通常の恒星よりも遥かに莫大な質量を擁する、このブラックホール・アルゴールをサクリアの引き上げで縮小させようなど、いかにすべての守護聖が力を合わせたとして……

背後の彼は微笑って言う。

「それで諦めようとする者など、あの中には一人もいない。」

地平線の先をもう一度振り返って、その先の皆を、彼を見た。

「うー。気分が悪ういよう……」

「頑張れ、マルセル。俺も頑張るからな、諦めるな！」

「諦めるなんて一言も言っていないもん！ 負けないからね、ランディ！」

「オスカー様、無駄にブラックホールの質量を増やさないでくれますか。ただでさえブラックホールからのサクリアの引き上げは大変だっていうのに」

「お前だって泣いてるじゃないか。セイラン。」

「泣いてません。涙が出るほど呆れてるだけです。」

「ちよい、オリヴィエ、ぼーっとすんなよ！ 何してんだ！」

「…ごめん。夢、見てた。」

「はア？」

「アンジェリーク、ごめんなさいね。こちらの宇宙の事に付き合わせて。」

「そんな事ないです、ロザリア様！ 私にとっても、宇宙と同じくらい大事な人ですから！」

「そーだヨねッ！ さっすが、そう来なきゃ、私のアンジェリーク☆」

その他の皆も、神鳥の光と闇の守護聖すらもが、無謀とも思えるサクリアの引き上げを無言で続けている。

「リュミエール」

彼は泣いている。そして私に呼び掛け続ける。事象の地平線の内から、何一つ私の応えが返らなくて。

「戻ってこい、リュミエール。……愛しているから。」

彼の涙が、再び私の顔に降り落ちた。

蓋が開いてゆく。

私が、彼が、永い間、開こうとしなかった蓋が。

切掛けは——猫だった。

お前が俺を再び見た、その時も。きつと。

あの新年の夜の、凍えた雪の中で、猫が鳴いたからだった。

互いが聖地に来たばかりで出会った俺達が、その時から互いに仄かな好意を抱いていたことを、お前は遥か昔に忘れただろう。俺も永い間、そうだったから。

稀有な青銀の髪。深海色の瞳。

何を見ても、何処へ行っても、俺とは全く違う物の考え方が新鮮で、そして心惹かれた。俺に無いものをお前が与えてくれ、俺に欠けるものをお前が埋めてくれた。時に意外なほど、強情なほど我を張るお前の芯の強さもこの上なく好きだった。

戯れに淡く唇を合わせたことすらあった。たまたまか意図的か判らない程度に俺が仕掛けたそれに、薄く頬を染めて俯き、けれど俺の傍らから逃げようとしないうちに、それ以上の衝動を抑えるのがやっとだった。

先に逃げたのは、俺だ。

『猫は泣いています。』

俯いた綺麗な横顔で呟く、リュミエールのその言葉を聞いた瞬間、その底無しの情の深さに恐れ慄いた。そして自分が自分であることを保てなくなるほどその存在にのめり込みそうになる予感に、お前への欲深い愛情でお前も俺も徹底的に壊してしまいたいそうになる予感に、俺は慄然として、反射的に罵った。自衛手段だった。何をどう言ったか全く覚えていないが、その場にいたルヴァがおろおろと狼狽え、そして恐ろしく珍しいほどに怒ったから、それは相当なものだったのだろうと思う。

まだ若く未熟だったあの頃にお前を愛していたら、俺が恐れた通りの筋書きが辿られてお前をぼろぼろにしていたら、あの時の自分の想いに蓋をしたことを、過ちだったとは思わない。

だがその過程でお前を手酷く傷つけたのだと、そして同じようにその淡く優しい記憶に、その心に、固く冷たい蓋を永遠に掛けさせたのだと、そう気付くのに長くはかからなかった。

最初から無かったことにした。俺も、お前も。蓋をして。目も合わせなかった。俺達がいる場合は常に緊縛感が付き纏った。何年もの間。

そしてその間、俺には幾らでも恋の相手がいた。幾らでも。

事態が動いたのは、あの新年の儀の最中に、猫の鳴き声が聞こえたからだだった。きっと。

お前が、俺を見ていた。永い間閉ざされていた、その深海色の瞳が、俺を辿っていた。それに気付いて、俺は狼狽に身じろいだ。

その瞳が揺れて、閉じられて、そしてゆっくり開いて、目覚めて。

その綺麗な深海色の瞳で、俺の瞳を見た。

それを逃せば、もう機会はないと思った。

リュミエールは完璧な恋人だった。誘いへの応え、夜を迎えて、過ぎて、別れの暁まで。何から何まで文句の付けようがなかった。稀有な青銀の髪、深海色の瞳。流れるようにしなやかな軀。滑らかな肌。

なのにその従順な軀に現実的な手触りは一切なく、実感と呼べるものは何一つ無かった。その瞳は俺の愛撫に熱を帯びて俺を見ているのに、その視線はずっと夢を見ているようだった。俺の腕の中にあるのに、薄布ひとつをいつまでも隔てたようなもどかしさに、抱き締めるほどにすり抜けていくような焦燥に胸が締め付けられた。

リュミエールが辛うじて一瞬でも目覚めたかと思ったのは、あの新年の儀に俺の瞳を見た時と、軀を交わして白光の中で至った瞬間だけ。

その胸の痛みをその時はどうしていいか判らず、何度も唇を重ね、何度か軀を交わし、結局俺は、夜明けの最後まで完璧な恋の相手を演じた。そうする事しか出来なかった。正しい答を知らなかつ

た。

暁の色彩に目を覚まして、逃れようとするお前。その軀を引き寄せて、抱き締めて、何度も口付けて。

目を合わせて。

綺麗な深海色の瞳。綺麗な。

何も言えない俺に、お前の瞳は静かに語っていた。

これ限りなのだと。

非日常は昨日限りで終わつたのだと。

どうすれば留められる？

どうすれば固く閉じられた蓋を開き、お前を目覚めさせる事ができる？

激しくなる胸の痛みを抱えたまま何度も愛撫を交わして、だけどすり抜けたお前が身支度を整えるのを呆然と眺めて、一步を踏み出したお前を後ろから強く強く抱き締め。

その時、ようやく答に気付いたから、耳元でただ一言、囁いた。

「愛してる」

恋の相手は幾らでもいた。幾らでも。

なのにこの扱われたような半身を埋めてくれる存在は、何処にもいなかった。お前以外には、何処にも。

……長いのか、短いのか、わからない時間が過ぎて。

ぽとり、ぽとり、と、俺の腕に水滴が降った。

そのリュミエールの無言の涙に、

信じられないのだと、

無かったことにするのだと、

蓋を開けさえしなければいいのだと。

それら全てを突き付けられて、俺は腕を緩めるしかなかった。

雪に閉ざされた静かな大地はすべての生物の気配を遮断していた。
猫の鳴き声も、もう聞こえなかった。

目覚めなかったリュミエールは、そのまま夢を見続けるように俺の瞳と同じ色の蒼い恒星へ引き寄せられ、あの夜に交わされたその身の内の俺のサクリアに気付かぬうちに翻弄され、その強い意志で宇宙と俺とを救い、けれど――

「……俺は二度、間違えた。あの時、お前を離すべきじゃなかった。

絶対に離さずに、傷付けたことを何度でも謝罪して、愛していると何度でも言うべきだった。信じてもらえるまで、お前が目覚めるまで、何度でも。そうすれば——」

自らの手で、最愛の存在を事象の地平線の内へ追い落とすような事にならずに済んだかもしれないのにと。

「ほんとそれ。やっぱ最低だわ、あんた。何回でも言うけど。」

オリヴィエも泣いている。

「リュミエール、そろそろ諦めて、戻ってきて。貴方が戻らなかったら、オスカーも私も、二度と笑えずに、このまま永遠に泣き暮らすわ。」

白い翼のアンジェリークも、泣いている。

彼が何故、あの新年の儀の雪の夜を、私と共にしたのか。そして私自身は何故、それに応えたのか。

「何故？」

愛していたからだ。それ以上の理由が必要だったか？」

愛してる。

「愛している、リュミエール。だから戻ってこい。……戻ってきてくれ。」

戻って。

涙が溢れて止まらない。

この身は既に、遙か昔に、貴方という存在に、もはや永遠に捕らえられたまま。

特異点のようなその無限の重力に引かれて、私の戻るところは、貴方の下^{もと}にしかない。

「猫が泣いている。蓋を開けて、戻ってやれ。」

その声に、背後の彼を振り返った。

「心配するな。俺はいつでも、お前と共に在る。」

ふわりと後ろから抱き締められて、私にその暖かさが溶け、彼の粒子が再び私と混じり合ったのが判った。

オスカー！。

貴方の下へ。

粒子となって、放射となって、光となって。

「来るぞ！」

神鳥の闇の守護聖が鋭く叫んだ。

「しつかり捕まえろよ、オスカー！」

「判っている！」

ゼフェルに短く答えたオスカーが、涙を振り払い、眩い放射に光り始めたブラックホールを凝視する。

愛しています。

愛しています。

愛しています。

「……………愛しています。」

……そうして、目覚めた私は。

「……愛してる。」

涙に濡れた貴方の、強く強く抱き竦める、腕の中。

箱から飛び出た猫が、小さく鳴き、笑って、そして歩み去っていった。

9 エピローグ…愛を謳う光円錐

「よお、オリヴィエ」

「こんにちは、オリヴィエ様」

綺麗な青空の下、宮殿の中庭のテーブルに先にいた同僚は年少組とルヴァの4人。たまに聖獣の宇宙の守護聖が来ることもあるけど、あっちもあっちでそれなりに忙しいから今日はいないみたいだし、女王陛下と補佐官殿とはある事情があつてきつと彼女らの執務室あたりにいて、ジュリアスとクラヴィスはどうせ来ないだろうから、残りはオスカーとリュミエールだけってことになる。ちゃんと来るかな、リュミエール。

テーブルの上にはどっしりとしたレトロな造りの、ラジオ。あ、本物のラジオ。スクリーンじゃなくて、ちゃんとスピーカーの付いてる、普通の。

呼び掛けの声の方に軽く手を上げて応え、私もラジオの近くの椅子を引いて掛けて、改めて空を見上げた。

良く澄んだ、高く綺麗な青い空。いい天気。だけどまあ、今日の今回もどうせ長続きしやしない。予言しく。

ここはリュミエールの暖かく優しい夢の中じゃない、あのお転婆な金色の髪の女王陛下の坐す^{いま}、本当の聖地だったから。

「あ」

誰かの上げた声に視線を巡らせてみれば、遠くから、手を繋いでこっちに歩いてくるオスカーとリュミエール。うわーって思ったけどよく見れば、手を繋いでるっていうより、オスカーがリュミエールを引っ張ってきてるんだと判った。

あ、リュミエールがオスカーの手を振り解いて。で、そこで二人で口喧嘩？　ていうか痴話喧嘩？　今？　今更？　はいはいそうですかー。

やがてふいと身を翻したリュミエールが、諦めたのか開き直ったのか、目元を少し赤く染めて先にこっちに歩いてきた。オスカーは後からゆっくり付いて来ている。

「……ごきげんよう」

私達の所まで来てから、リュミエールは集まつてる私達の方を見て、顔をうつすら赤くしたまま、何とも言えない微妙な表情で一応挨拶をした。

「いらつしゃい、リュミエール。ほらほらそんな端っこに座らない、こっちこっち。主役でしょ。」

「あの、そろそろ、この会合もお終いにしませんか……？」

「何言ってるの。皆んな毎週楽しみにしてるんだよ。私達だけじゃない、全宇宙的にも史上空前の大ヒット番組でしょ、もはや。いい加減諦めなさいな。」

「……………」

リュミエールが紅潮の増した頬を片手で覆った頃、オスカーがようやく着いて、無言のその涼しい顔で皆と同じように椅子に掛けた。

もうそろそろ、番組の始まる時間だ。既にスイッチの入っていたラジオの選曲をもう一度きつかり合わせる。

『……、全宇宙のリスナーの皆様、こんにちば。『愛を謳う光円錐』の時間です。本日はここ、惑星アルミナスよりお届けいたします。

今回は光円錐の到着まで今少しの時間が見込まれますので、それまで、すでに皆様、よくご存知のこととは思いますが、改めまして『愛を謳う光円錐』について解説いたします。

大質量星として名を馳せていた恒星アルゴールが突如として謎の重力崩壊によりブラックホールを形成し、そしてまた突如として、不可解な大量の放射を発した事象より話は始まりました。その原因を探るべく、光の速度で進む放射を各星系で観測している最中、天文学者たちは、その放射が電波としての性質を有していること、また、その電波をテレビやラジオで復号化した際、実に不思議な事に、その星系の言語で『愛している』に相当する音声を受信されることを見出したのです。

すべての光、すべての通信と同じく、この放射は一点より光の速度で拡大する球面として宇宙に広がりつつあり、その広がり縦・横の二次元の平面で表すと円形に、また一点から広がるその円形の拡大の様子を、平面に直行する時間軸を用いて表すと、この放射の経路は一点を頂点とする円錐形で示されます。時間の経過に伴って拡大を続け、各星系に到達しては愛を謳うこの放射は、やがて『愛を謳う光円錐』と呼び習わされるようになりました。その不思議な音色は、どの星系のどの言語であっても、美しく深く純粹で、我々の心に直接響き、聴く者すべてを魅了して止みません。

さて、ではそろそろその放射、光円錐がこの惑星に到達する時刻です。皆様、光円錐が謳う愛の

謳を、どうぞお聴きください。』

皆も黙って、私も目を閉じて、ラジオから流れてくる音に耳を澄ませる。
聖地に吹く心地よい風も、今だけは止んでいる。

.....

.....

.....

……現地の惑星の言語だから言葉としては当然判らないんだけど、その音色はいつも歌声のような旋律で、涙が滲みそうになるほど深く切なく、優しい。

『……皆様、いかがでしたでしょうか。きっと皆様の心にも深く響いたことかと思います。

さて、では前回の放送から本日までに各地の惑星で収録された、光円錐の様々な愛の謳を続けてお聴きください。』

「あの、もう、消してもいいですか……？」

「駄目」

真つ赤な顔して懇願っぽく言うリュミエールの言葉を、皆の代表で一蹴する。とはいえ聴くなら、まあ録音したやつもいいけど、やっぱり生放送のがずっと心に滲みる。

「光円錐が広がるにつれて放射の強度はだんだん弱くなってるんだけどよ、放射がこれから先に到達する予定の惑星じゃ、光円錐の愛の謳が聞きたいばかりに放射の受信準備にこぞって力を入れ始めてるらしいぜ。惑星内の天文学会の協力体制構築のために、国家間のいざこざがとりあえず収まった、つてところが、ひとつやふたつじゃねえってさ。」

「凄いいね、リュミエール。さすが優しさを司る水の守護聖様。声ひとつで争い事を収めるなんて、守護聖の鑑かがみじゃないの。」

「……………」

ラジオから流れ続ける愛の謳と私の誂い混じりの言葉とに、リュミエールはもうテーブルの上に突っ伏して微動だに出来ないでいる。いや、ちょっと茶化して言っではいるけど、割と本気でそう思ってるんだよ？ 私。

それでその愛の謳のただひとりの本当の対象であるところの、炎の守護聖は、何かしらフオローを入れるでもなく、ましてや照れるでも恥じるでもなく、平然とした顔でラジオから流れる謳に耳を傾け続けていた。

リュミエールの夢の中と違って、この本物のオスカーはほんとと優しくない。今回の件も、原因のかかなりの部分はそもそもいつまでも自分の想いを認めようとしなかったこいつの所為だよね。まあその分、夢の中に比べて相当に愛情過多らしいけど。相当に。

リュミエールが事象の地平線の中へ堕ちて、私は皆と一緒にサクリアの引き上げをしながら、朦朧として夢を見てた。

多分、リュミエールの意識をこの世界に留めさせようとして無意識に使ってた夢の守護聖としての力と、リュミエールの無意識が望んで見てた夢とが共鳴して。あの時間だけに限って言えば、こちのオスカーよりも私の方がずっとリュミエールに近いところに居たんだと思う。

永い永い夢。

「夢が一人で見られるものだと思っていたか」と、あのオスカーは言った。

夢の守護聖であるとはいえ、その真偽の程は判らないけど。例えば私が、故郷の雪と氷に閉ざさ

れた冷たい星で果てしなく永い時を過ごして、この聖地の皆と交わした素粒子がとうの昔に消え去って、そうして夢を見た時、あなたたちの事を思い出せるのかどうかは定かじゃないけど。

だけでもリユミエールが、もしくは私が、また今回みたいな事態に陥った時、リユミエールの夢の中に私が、私の夢の中にリユミエールが出てきて欲しいと思うから。だから未だテーブルに突っ伏したっきりの水色の髪を、何度も撫でた。

リユミエールは赤い顔のままちらと私の方を見た。オスカーは露骨に嫌な顔をする。

いいじゃないの、オスカー。不確定性原理が許す範囲の素粒子を交わすことくらい、許してくれだって。好きなだけリユミエールを独占しててくれに。

あの後、聖地に無事に帰ってきたリユミエールをまだ大勢が取り囲んでる真っ最中、痺れを切らしたオスカーがリユミエールの腕を引っ張ってって輪の中から連れ出した、ていうか連れ帰った、たぶん私邸に。

あの炎の守護聖が、無言で無表情で、そしてぼろっぼろ泣いてたから、流石に皆、誰も何も言えずにそのふたりの背中を見送った。

感情を爆発させたオスカーがそれからリユミエールに何をしたのか、たとえ想像したところで、まあ野暮の極みでもあり、自明の至りでもあり。それから1日半、ふたりの姿を見なかった、とだけ言っとく。1日半でひとまず切り上げたつてのは結構頑張ったほうじゃないかな。残り半日分を休暇にしてしまわずに登殿したのはリユミエールが遠慮してのことかしらね、やっぱり。

ただ、これまで視線を合わせることすらままならなかった最愛の存在と、目を合わせて、触れて

もいい、抱き締めてもキスしても、徹底的に好きなようにしてもいい、そして何より、それを相手からも心の底から望まれてる、っていうのが、どれだけ幸せでどれだけ甘やかなことか、考えてるとついうっかり羨ましくなっちゃいそうにはなる。

ただまあ、経緯が経緯だっただけにまだ落ち着くには程遠いらしく、それからというもの、宮殿やら庭園やらの物陰で強引に水の守護聖を抱き締めたりキスしてたりする炎の守護聖を、まあ一度ならず見かけて、この間とうとう

「迷惑だ」

と無表情で発言するクラヴィスを見た。目撃しちゃった、四者会談。

「だからといって、休暇で外界に遣るなど……」

こっちはジュリアス。要するに外界との時間差を利用してまとまった時間を二人にやれ、っていうことらしかった。

恐縮しながら固辞するリュミエールと、反対するそのジュリアスとを目の前にして、オスカーはリュミエールの目を見、その手を握って

「そうか？ 俺はずっと、お前と時を過ごしたかった。海の波も潮騒も、一面の向日葵畑に差す夕焼けも、吹雪も嵐も、いつだって、お前がここにいればと、お前と共に見たいと願っていた。」

なんてことを、真剣な目して言ったものだから、リュミエールはこれ以上ないほど赤面し、ジュリアスの顎はかっくりと落ちたまま、

「……だから迷惑だと言ったであろう」

と無表情に言葉を重ねたクラヴィスとを、辛うじてその場を離れてから後で思い出して死ぬかと思

うほど笑った。

結局その計画は実行の運びになったらしく、近々3日ほど二人で休暇を取る、という風な話を、さり気なくオスカーから聞いた。

場所にもよるけど、聖地の一日と外界との時間の流れの差は、最低でも数十日相当。

海の波、向日葵畑、吹雪、嵐、朝焼けに夕焼け、天の川の星々、遊園地に水族館、花火、噓せ返るような暑さ、凍える寒さ、腕の中の人の微笑。

それでもオスカーなんかは、足りない、って言いそうだと思った。これまで隔たってきたひとと、同じ時間を過ごすには。

まあ頃合いを見て、希望すれば、また行けるんじゃないかな。あの白い翼の少女が、この宇宙の尊き女王陛下である以上は。

「あ」

また、誰かが声を上げた。ほらほら、来た。

空はすっかり灰色の雲に覆われて、ぽつ、ぽつ、と雨粒が落ち始めた。見る間に雨粒は増えて、あつという間に本降りの気配になる。

「アンジェリークう！」

慌ててラジオを持ち運んで皆と一緒に宮殿に引っ込みつつ、笑いながら私が言った。あのね、あの子、光円錐の愛の謳を聞いてると、思い出して泣いちゃうんだって。で、皆の前だとそれが恥ず

かしいって。だからいつも放送はロザリアと二人で、別の場所で聴いてる。可愛いでしょ？

ここは暖かいだけの夢の世界じゃない、意外で波乱に満ちていて、皆がいて、こんなにも楽しく幸福な世界だった。

「罪が深いな、リュミエール。宇宙を統べる女王陛下を毎回毎回お泣かせするとは。」

雨を払ってたら、オスカーが皮肉を効かせてそんな事を言った。ほんとと余計な小憎たらしいことを。そういうところは相変わらずだね。

「……大変申し訳ありません。それでは早速、女王陛下のお心をお慰めしに参上することにいたします。」

頬を染めたまま素知らぬ顔で身を翻しかけたリュミエールを、オスカーは片手で肩を抱いて引き戻し、その唇に深々と口付けた。

○初出

WATER BEAT

<http://waterbeat.hisagi.com/>

シュレーディンガーの猫

2002年12月23日～12月29日

ハイゼンベルクの不確定性原理

2003年1月19日～2017年4月13日

オルバースの夜空

2017年4月15日～4月22日

アインシュタインの特異点

2017年5月20日～6月4日

シュヴァルツシルトの地平線

2017年6月11日～6月18日

ホーキングの粒子線

2017年6月25日～7月15日

崩壊する真空

2017年7月15日～7月23日

そして再び、シュレーディンガーの猫

2017年7月29日～7月31日

エピソード…愛を謳う光円錐

2017年8月7日～8月11日

シュレーディングアの猫

発行日 2022年10月17日

発行者名 楸

連絡先 WATERBEAT

<https://waterbeat.hisagi.com/>

表紙画像

Cosmic Cliffs in the Carina Nebula
RELEASE: NASA, ESA, CSA, STScI
Public Domain